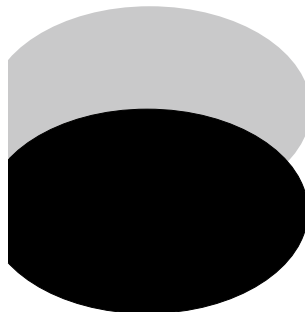


2010213

絵本学会 NEWS No.38

発行：絵本学会
発行日：2010年2月13日
編集：絵本学会広報委員会
絵本学会事務局：〒567-8578 茨木市宿久庄2丁目19-5
梅花女子大学児童文学科 香曾我部秀幸研究室内
E-mail:ehon-g@baika.ac.jp
<http://www.u-gakugei.ac.jp/~ehon/index.html>



絵本学会

第12回絵本学会大会報告
大阪国際児童文学館主催シンポジウム「アジアの
絵本の世界へようこそ 中国と日本の絵本」を終えて
リレーエッセー〈夢三題〉内田麟太郎
インフォメーション-絵本関係展覧会・イベント
委員会から
事務局からのお知らせ
第13回絵本学会大会のご案内

第12回絵本学会大会報告

第12回絵本学会大会実行委員長 棚橋美代子

2009年6月27日(土)・28日(日)の2日間にわたって、第12回絵本学会大会が京都女子大学(京都市東山区)で開催されました。

実行委員は、田中泰子・齋藤壽始子・舟橋齊・丸田まゆみ・棚橋美代子・川北典子・佐藤文郎・矢野真の8名。運営委員は、内山三枝子・加藤道子・山田千都留・松崎行代・浜崎由紀・蓮岡修・向平知絵の7名です。2名の会員以外は入会と同時に委員となった「若い」メンバーで大会の準備をさせていただきました。

会場は土曜も授業が組み込まれており、参加者の皆様には当日変更も含めて迷惑をおかけいたしました。そして、私たちが何よりも心配いたしましたのは「新型インフルエンザ」による開催の危機です。会員の出席確認の際「職場で関西方面への出張は見合わせるようにいわれていて欠席です」という返事をいただくにつれ不安が増していきました。

結果的には1日目・2日目各300人もの方々が参加して下さり、ご協力に心から感謝いたしております。ありがとうございました。

今大会では「絵本と子育て支援」をテーマに、「いのち」の大切さをどのように表現し伝えていくのかを考えようと思いました。講演の第1日目は6月27日13時15分から長谷川義史氏の「絵本で楽しむいのちのリレー」でした。絵を描きウクレレを弾きながら、いきること・いのちの重みをユーモラスに演じて下さいました。2日目は6月28日11時15分から柳田邦男氏が「子どものころをはぐくむ・いのちをつなぐ」と題して語って下さいました。異質な講演形式・表現を通してテーマに迫っていただけ、多様な参加者の共感を得ました。

研究発表も2日間に分けておこなわれました。今回は大会テ

マに「絵本と子育て支援」とあるように、子育て支援の視点を取り入れた研究がいくつかみられました。「絵本」という領域が多様性をもつものであり、今後、社会情勢の中で「子育て支援」という視点が重要さを増すと共に研究も深化を遂げていかなければならないものだと改めて感じました。

作品発表では、会場が照明や展示壁面などの設備がない中での展示でした。しかし、発表者の方にもご理解いただき、机上での展示となりました。作品そのものの質もさることながら、発表形式においてもそれぞれ多様で作品を深く鑑賞することが出来ました。

大会2日目の13時30分からラウンドテーブルが3つに分かれて行われました。ラウンドテーブル1は「ハンディキャップ絵本の動態をめぐって」と題して、話題提供者に写真家であり絵本作家である星川ひろ子氏、てんやく絵本ふれあい文庫代表の岩田美津子氏においでいただきました。コーディネーターは大会実行委員の舟橋齊氏が務めました。このラウンドテーブル1では、現在、絵本領域において「ハンディキャップ絵本」がどのような位置づけにあり、出版状況がどのような状態であるかを話題提供していただきました。星川氏は家族が「障害者」であり、岩田氏はご自身が視覚障害者でいらっしゃいます。「ハンディキャップ絵本」を広めていく中で、様々な障害に出会いながらも真摯に向き合い、「ハンディキャップ絵本」を普及してこられました。「ハンディキャップ絵本」のおかれている厳しい現状をお伝えできたのではないかと思います。

今回の参加者は現場で「障害者」と向き合っている方が多くおられたのか、現場における絵本の扱い方についての質問に偏り、ハンディキャップ絵本の現状や今後の展望を話し合うまでには至りま



福徳美代子大会実行委員長挨拶



ハンディキャップ絵本の展示

せんでした。しかし、話題提供されたことで「ハンディキャップ絵本」のあり方について考える第一歩となりました。

ラウンドテーブル2は「ロシアの絵本作家たち」でした。話題提供者に偕成社編集者の千葉美香氏、名古屋大学講師の山崎タチアナ氏、子どもの本研究家の伊藤元雄氏、コーディネーターは大会実行委員であり、「カスチャールの会」主宰の田中泰子氏が務めました。ロシア絵本は邦訳されているものが少なく、日本人に馴染みの作品は限られています。しかし、今回、絵本学会大会と京都女子大学図書館共催で「カスチャールの会」のご協力のもと、絵本展「ロシアの絵本の原画」も京都女子大学学園見学記念館錦華殿で同時開催させていただくことができました。参加者の皆様方にも多くご観覧いただき楽しんでいただけたのではないかと考えております。「カスチャールの会」の方々にはこのような貴重な機会を与えてくださったことに深く感謝いたします。

山崎タチアナ氏は、ご自身の幼少のころお母さんにウクライナ語、ロシア語、ポーランド語などで昔話、童謡をたくさん聞いて育ったことをお話してくださいました。ロシアは口承文芸（フォークロア）の宝庫であり、その中でお育ちになられたことを熱く語って



ロシア絵本原画展

くださいました。千葉美香氏はロシアの絵本を編集するにあたってご苦労なされたことやロシアの絵本作家の作品に対するこだわりが質の高さを物語っていることもお話してくださいました。伊藤元雄氏は現在もロシアの作品を編集されています。ロシア作品の編集の原点となっているのは、瀬田貞二さんと光吉三弥さんと一緒に編集されたロシア昔話集「飛ぶ船」だと語ってくださいました。このとき約束したことは、原語から訳せる人に訳を頼むことと、現地の画家の挿絵を使うことを原則とされたそうです。マーヴリナとの仕事についてもお話してください、ロシアの絵本が身近に感じられました。また、ロシア絵本が伝えようとしているものを共有できたように思います。

ラウンドテーブル3では「絵本と子育て支援」と題し行われました。話題提供者は、実際、子育て支援の場で活動に取り組んでいらっしゃる京都嵯峨芸術大学で大会実行委員である佐藤文郎氏、京都YWCA 親子ライブラリー共同代表の平野富希氏、前・京都子育て支援総合センターこどもみらい館総務課情報担当係長の小川登志子氏にお願いし、コーディネーターは大会実行委員の齋藤壽始子が務めました。

3人の方はそれぞれ、私立大学、NGO、自治体の三種の現場での体験をもとに、絵本と子育て支援の現状と問題点を①社会面 ②人材面 ③経済・財政面にわたって報告をいただきました。詳しい報告については後の稿を見ていただきたいと思います。「絵本と子育て支援」と一口にいっても多様なアプローチがあり、それをささえる学会の社会的な責任を考えさせられる討議内容でした。

今回の絵本学会大会に伴い、京都女子大学B校舎114室・116室において「たんぼひろば」（子育て支援の場）を開設いたしました。対象は絵本学会大会の参加者親子、子ども、地域住民の親と子ども、近隣の放課後児童クラブの子ども達などでした。担当は京都女子大学発達教育学部の児童学科に在籍する4回生と大学院生が企画し、児童文化研究会会員の亀井恵世氏、京都女子大学学生ボランティアの協力を得ました。内容は絵本学会開催時間の間、2日間とも終日「工作コーナー」を開設しました。また、「絵本の読み語り」と人形劇講演」を30～40分の時間で2～4回講演しました。絵本の読み語りでは、大会の講演会、ラウンドテーブル、絵本展の内容から「つながり」をテーマとし、それぞれの国や地域で受け継がれていく「民話」、家族・友情・同じ時代を生きる人など、人と人とのつながり（「ハンディキャップ」の有無を越えて）を描いた絵本を基本としました。参加者の方は、1日目が子ども43人、大人8人、2日目が子ども14人、大人15名とたくさんの方にご来場いただくことができました。

ラウンドテーブル終了後、15時45分から閉会式が行われ、2日間にわたる絵本学会大会を無事終了することができました。至らない点は多々あったかとは思いますが、天候にも恵まれ、多くの方々のご協力により、滞りなく大会を終えることができましたことをここに深く感謝いたします。本当にありがとうございました。

講演

絵本で楽しむいのちのリレー

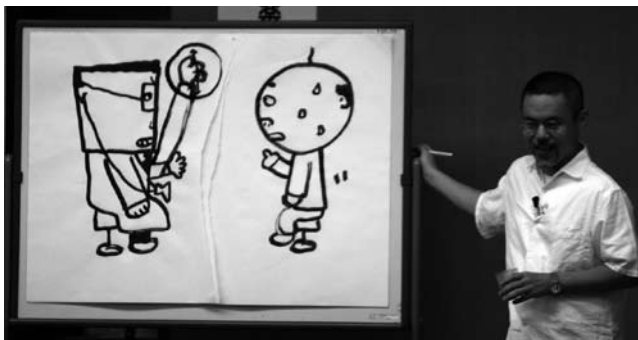
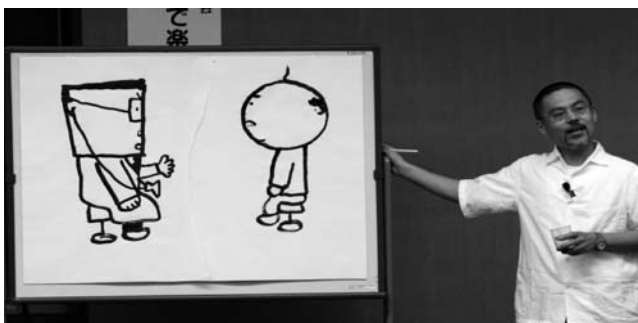
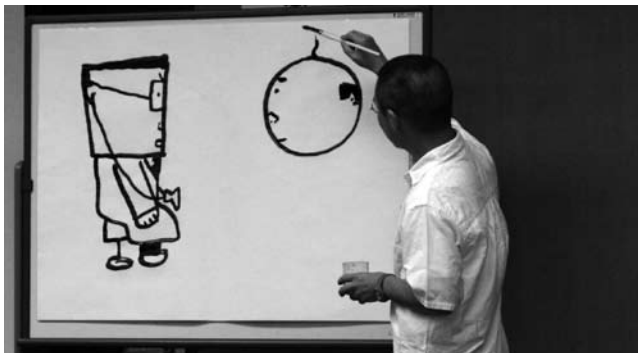
講師 長谷川義史

絵本作家

「絵本で楽しむいのちのリレー」と題して行われた絵本作家・長谷川義史氏の“講演会”は、だがしかし、講演会というよりも、われわれ観客を前にしたステージでのショーのようであった。自ら“ライブ紙芝居”と銘打ち演じられたパフォーマンスは、絵本というかたちの枠にとらわれない無条件の楽しさを観客に提供してくれたのだといえる。

絵本の創り手としての長谷川氏は、文章を考える時、「声に出して読みながら、演じながら創作する」のだという。まず、最初に演じられた“ライブ紙芝居”は、医者と患者の軽妙なやりとりであった。模造紙に描かれた登場人物は、長谷川氏の淡々とした語りによってまさに命を吹き込まれるといった様子で、話し始め、動き出す。笑いのツボを押さえた視覚に訴える表現方法は、従来の型にはまらない、しかし、上方独特の笑いの文化を根底に据えた手法であった。

続いて読み語られた『おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃん』（BL出版）は、長谷川義史氏のデビュー作



である。5歳の「ぼく」を中心に、38歳の「おとうさん」、そして72歳の「おとうさんのおとうさん」が登場し、さらに時代が遡るとともに移りゆく背景のなかで、数え切れない「ひいおじいちゃん」が「ぼく」の前に現れ、最後は「おさるさん」にまで辿り着く。ラストの「ぼくは……／だれのおじいちゃんになるのかなあ……。」は、自らのルーツを知り、多くの大切な人たちとの繋がりに想いを馳せた5歳の男の子なりの呟きである。そこに至るまでの「ぼく」の疑問が、頁をめくるたびに重ねられ、深められていく様子が、先ほどまでの“ライブ紙芝居”の延長上にあるようで、観客の視線をしっかりと惹きつけていた。初めて絵本で見たときには少々乱暴で荒削りに思えた絵も、“ライブ”で直に描きつけられる絵を見た後には、味のある親しみやすい絵のように思えるから不思議である。また、物語のなかで次々と現れる先祖の姿が、そのときどきの時代のなかで、一貫して生活臭の濃い一般庶民であるのも作者の人となりを表しているといえる。

本作品は、“いのちのリレー”へのメッセージが込められた、長谷川氏にとっても思い入れの強いデビュー作なのであろう。当然のことながら、作者が自作を読むということは、読者が単に絵本のなかから読み取ることのできる思い以上のものを提供されるのだということに改めて感じられる場面であった。

そして、講演会は、再び“ライブ紙芝居”に戻り、今度は5歳の「ぼく」について演じられる。大阪府藤井寺市で生まれ育った長谷川氏の幼少期の思い出が、昭和30年代という時代背景が詳細に脳裏に浮かぶようなある種のノスタルジーを込めて語られた。この時期、「おとうちゃん」だった人、「おかあちゃん」だった人、または「ぼく」「わたし」だった人、聴衆の種々の年齢層も巧みに取り込んで、下町の庶民の“普通の”日常生活と子ども心が、画面に描き出された。車で売りに来るホットドッグを食べたくて仕方がない「ぼく」と、かけひきを楽しみつつ決して買ってはくれない「おかあちゃん」……。だが、ある日、「おとうちゃん」が、近隣の飛行場に航空機ショーを見に連れてくれる。そして、その帰り道、憧れのホットドッグをいとも簡単に食べさせてくれたのであった。「ぼく」のなかに膨らむ「おとうちゃん」への想い。しかし、その大好きな「おとうちゃん」は、39歳の若さで亡くなってしまふ。

ユーモラスな「ぼく」と「おかあちゃん」とのやりとりに沸き起こった爆笑のあとに訪れる、大切な人を喪った「ぼく」の哀しみに対する共感。会場の一体感が確かなものになったところで、絵本『てんごくのおとうちゃん』（講談社）の紹介に移る。アイデアが浮かんだとき、長い年月をかけてねかせておき発酵させることも多いという長谷川氏の絵本創りの手法が顕著な作品でもある。ただ、ねかせておくだけではなく、5歳の「ぼく」との間を行きつ戻りつしながら、そこに想いを重ねて創りあげられたのであろう。

「はいはい、てんごくのおとうちゃん、げんきにしていますか」……作品のなかでは、亡くなった「おとうちゃん」への「ぼく」からの手紙のかたちで、数少ない「おとうちゃん」との大切な思い出が語

られる。キャッチボール、ウクレレ、ホットドッグ、そして別れの日。幼い子どもも子どもなりに、哀しみの処理を行い、それを乗り越えていく。5歳で別れた「おとうちゃん」は、永遠に「39歳のおとうちゃん」のままで、だが、「ぼく」の成長を確かに支える力となって「ぼく」のなかに生き続ける。私的な要素の強い作品ではあるが、できあがった絵本が、「自分の手を離れて、たくさんの人のもとに歩いていく」と長谷川氏が述べているように、個人の想いも、それに共感できる多くの人の気持ちに支えられるとき、普遍化され、さらに深められていくこともあり得るのだろう。

ウクレレにまつわる「おとうちゃん」との思い出も語られたところで、長谷川氏自らのウクレレの弾き歌いによって、再び会場はにぎやかに盛り上がる。長野ヒデ子氏、中川ひろたか氏らとのCD制作についての裏話なども語られ、長野氏作の「ハナハナうた」「メソメソうた」「ヘソヘソうた」が披露された。続いての「おたんじょうびのうた」で、会場からちょうどこの日に誕生日を迎えた参加者が現れたことは、できすぎた演出であったともいえる。最後に「ようちえんのブルース」で、等身大の子どもの心情が吐露され、多少なりとも子どもとかかわることを生業としている聴衆が多いなかで、耳の痛い歌詞も多々聞かれ、自嘲気味な笑いも起こったところで、歌と語りのショウタイムは幕が閉じられた。

講演会の最後に紹介された絵本は、『ぼくがラーメンたべてるとき』（教育画劇）であった。「ぼくがラーメンたべてるとき、地球のうらがわではなにがおこってる？」・・・「ぼく」が、繰り返される日常生活の営みのなかにいるとき、世界の子どもに想いを馳せると、遊んでいる、働いている、そして戦で傷つき倒れている子どももいる、そんな現実を子どもたちに気づかせ見つめさせる作品である。絵本の創作をとおして、長谷川氏が常に読者に伝えようとしているものを思うとき、この絵本で講演の最後を締めくくることがの意味がより深く感じられた。

長谷川義史氏の講演会を聞いてから、書店の絵本売り場の新刊や話題本コーナーに、いかに彼の作品が多く並んでいるかに気づかされた。作者特有のデフォルメされた人物像や緩い線の感じなど、絵を見たときに手に取る読者、取らない読者の層は分かれるかもしれない。だが、笑いあり涙あり、で聴衆を惹きつけた講演において、長谷川氏のなかに一本筋をとおして貫かれている確かな想いを感じ

ることはできたと、その姿勢に多くの参加者が共感したのではないと思われる。絵本作家・長谷川義史氏のいのちをつなぐリレーは、これからも長い道のりをたくさんの子もたちと走り続けられるのであろう。

（文責 川北典子）

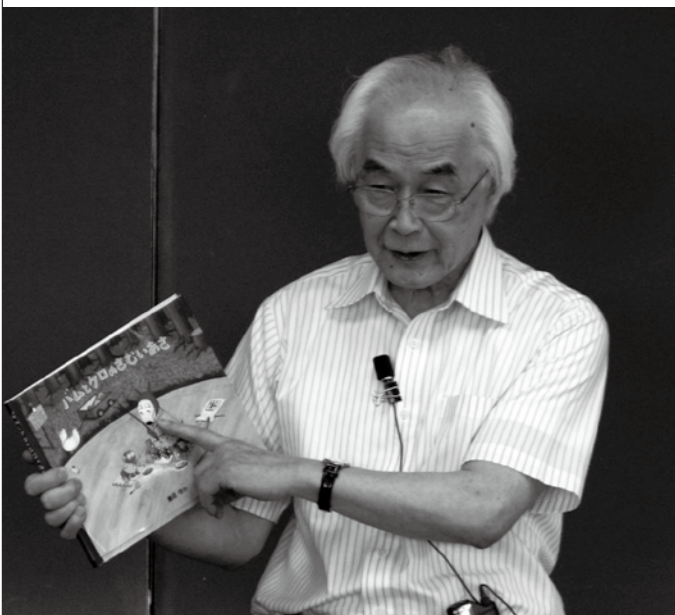


講演

子どもの心をはぐくむ・いのちをつなぐ

講師 柳田邦夫

ノンフィクション作家



【絵本について語り始めたきっかけ】

私が絵本について語り始めたのは、10年ほど前からです。1999年『文藝春秋』10月号に、同年6月の高槻市（大阪府）での講演をまとめた「いま、大人が読むべき絵本」と題したエッセイを寄稿したのがその始まりでした。私は、息子の死をきっかけにあらためて絵本を読み直す中で、大人こそ絵本をという思いを持つようになっていました。

そのエッセイの中で、2歳8カ月の弟の死に直面した8歳と6歳の幼い姉兄が、『わすれられないおくりもの』（作・絵：スーザン・パーレイ、訳：小川仁央、評論社）によって、弟の死を理解し、そしてその後も弟の魂をずっと胸に抱いて生きていくことが出来たというある家族と絵本の出会いを紹介しました。

これを読んだ河合隼雄氏から即日ファックスが届き、河合氏、松居直氏との「絵本の可能性」と題した鼎談が企画されました。それをまとめ直したものが、『絵本の力』（河合隼雄・松居直・柳田邦夫、岩波書店、2001年）です。

当時、私の絵本の見方について、「命の問題や死について絵本をメディアにして語るのは、母親たちを困らせるだけでやめるべきだ」と、意見する人もいました。しかし私は、命を考えたり、死と向き合ったりすることは子どもにとってもとても大事なことであったと考えていました。幼くして親しい人の死に直面し残された子どもにとって、死や別れをしっかりと受け入れられたかどうか、その子どもの一生や心の形成に大きな影響を与えると思うのです。絵本は、そこにかかわっていける可能性を持つと考えています。そして、子どもの回りに居る大人が絵本をしっかりと見なくてはいけないと思う

のです。今は、大人よりも子どもが大事で、子どもがしっかり生きてほしいということをお先に考えますが、その際、子どもを育てる親は大事な存在であって、親子で絵本を楽しんでほしいと思っているわけです。

また私は、バブル崩壊後のマネーゲームの社会において、人が生きていくとき何が大事かを考えました。そして、この時代にこそ心を育むことが大事だと思ったのです。

【こころをはぐくむ絵本の力】

人間として生きていくとは、社会の中で、他者との関わりの中で生きていくことです。つまり、他者の心を理解し、かわり、そして自分の悩みを征服していくことといえます。しかし、こうした生育環境が保障されていない子どもたちは、心がゆがんで、予想もしない事件を引き起こすことが多々あります。乳幼児期の臨床に取り組む医師たちは、親子の関係から子どもの心の育ちを捉え、アタッチメント（愛着）の重要性を言っています。アタッチメントの不足や、我慢を虐げられる中で全ての感情をしまいこんでしまった子どもは、一見手の掛からない良い子として育ちます。しかし、小学校3・4年生の思春期前期の自我が確立される時期になって、コミュニケーション力が育っていないことで、自己主張は強くなるけれども対人関係がもてない状態が発生し、キレて人生を台無しにしてしまうような事件を起すことが多々あるのです。

絵本を見るとき、心の発達という視点で見ると、絵本の見方が心理学者の目に近くなってしまいます。そういう目だけで見てはいけないと思うのですが、青少年の事件を幼少時の生育環境の問題と結び付けて捉えると、広く大人たちに、絵本を通して子どもの心の発達を理解しよう、絵本を見ていれば子どもの心がわかりますよ、と伝えたいのです。

『ちょっとだけ』（作：瀧村有子、絵：鈴木永子、福音館書店）妹が出来て、お母さんの手が妹にそそがれるようになったお姉ちゃんは、「ちょっとだけ」と我慢したり、自分で「ちょっとだけ」できるようになったりと、ちょっとずつがんばって「お姉ちゃん」なっています。この絵本のお母さんは、それにちゃんと気づき、「ちょっとだけだっこして」というお姉ちゃんに対し、「いっぱい抱っこしてもいいですか」とお姉ちゃんをしっかり抱きしめます。

私は、この絵本と出会い、絵本作家はすばらしいと思いました。そして、自分も絵本の制作にかかわりたいと考えるようになり、絵本の翻訳を始めたわけです。翻訳する絵本を選択する際、私は子どもの心の発達に問題意識をきちんと持っている作品をこだわって選び翻訳します。

いくつか翻訳した絵本を紹介します。

【翻訳した絵本から】

『少年の木』（作・絵：マイケル・フォアマン、訳：柳田邦男、岩崎書店）鉄条網で囲まれた紛争地帯。少年はある日、そこに小さな緑の葉が芽を出しているを見つけます。少年は水をあげ大事にその木の芽を育てます。その木の芽は一度軍隊に踏み潰されてしま



いますが、再び顔を出しました。それから再び、少年はいのちをかけて大事にその木を育てます。

今、訳し終えたばかりの、ベルギーの作家の絵本ですが、両親をなくした3人のきょうだいが、親戚にばらばらに預けられ、周囲の人々に支えられながら育っていくお話です。悲しみは消えないけれども、生きていかななくてははいけない。その時、周囲で親身になって支えてくれる人の存在はなくてはならないものです。アタッチメントは、親でなくてもその代わりになってくれる人がいれば、その子の心の支えになりうるのです。両親をなくした女の子は、夜ベッドに入って、ふと自分の不幸を感じて悲しくなります。しかし、「私は今幸せ、大きくなったらいっぱい子どもを持ち、誰もが集まってくる家を作りたい」と語る明るさを持っているのです。

『エリカ 奇跡のいのち』（作：ルース・バンダー・ジー、絵：ロベルト・インノチェンティ、訳：柳田邦男、講談社）ナチスドイツの時代、死へ向かう列車から、若い母親は一万分の一の奇跡を信じ、赤ちゃんを投げ落とします。その赤ちゃんは奇跡によって救われ、エリカと名づけられて育てられます。エリカは結婚し、母となり、そして絵本では50歳になったエリカが、産みの母を思い語ります。その中の一言、「お母様は自分は死に向かいながら、私を生に向かって投げたのです」、私はこの衝撃的な言葉を今の時代に伝えるべきだと考え、出版社の不安を説き伏せて発行を強く勧めました。そうして出来上がった1冊です。

『だいじょうぶだよ、ゾウさん』（作：ローレンス・ブルギニョン、絵：ヴァレリー・ダール、訳：柳田邦男、文溪堂）年老いたゾウは自身の最後を感じますが、ゾウを頼る幼いネズミはそれを受け入れたくありません。しかし、月日が経ちネズミの心が成長するにつれ、相手を思い、相



手に一番いいかたちを作っていかなければいけないと思えるようになります。これは、大人こそが読むべき絵本だと思います。

『だいじょうぶ だいじょうぶ』(作・絵:いとう ひろし、講談社)も、共通のテーマがあります。おじいちゃんがぼくに語り掛けてくれる「だいじょうぶ だいじょうぶ」と言う言葉。常に繰り返されることばのクセは、魔法のように安心感を与え子どもの心の支えになっているのです。そして、子どもが成長するに従い、今度はそれを自分が語りかけることで、周りの大事な人を支えることが出来るようになるのです。

【子どもと絵本の出会い】

メディア社会になり、スキンシップや生の肉声の中で子どもを育てることの大切さが一層言われるようになってきました。そんな中、東京都荒川区では「親子で絵本のまちキャンペーン」を展開し、その一環として感想文の募集を行ないました。私が審査委員長を務め、柳田邦男大賞を設けました。この賞を受賞した感想文を紹介します。

小学3年生女兒の「私は私らしく」と題した感想文は、小学校1年生の時に『たいせつなきみ』(文:マックス・ルケード、絵:セルジオ・マルティネス、訳:ホーバード・豊子、いのちのことば社)と出会ったことをまとめています。

1年生の時に体育が嫌いである休みをした時、母親が次の日に、この絵本を買ってきて読み聞かせをしてくれました。木で出来た小人のエディは、ダメ印シールがいっぱい貼られています。そんなエディに彫刻家エリは、エディがどんなに大切な存在かをわからせようとします。この女兒はこの絵本を母親に読んでもらい、お母さんが自分をどれくらい大事に思っているかを聞かされます。彼女は、小学1年生の時は、おそらくこの時感じたことを自分の中で言語化することが出来なかったと思います。しかし、3年生になり、自己肯定感もてない自分を見直し、それを受けとめ、そして言語化し表現する力をつけたのです。小学校1年生の出来事は、この子の人生のジャンプだったと思われまふ。私はこの感想文を読んで、子どもを見る目が変わりました。そして、このようにタイミングよくその子どもにあった絵本を出会わせてくれる母親を、すばらしいと思いました。

もう一人の受賞者は、小学5年の男児です。取り上げた絵本は『バムとケロのさむいあさ』(作・絵:島田ゆか、文溪堂)です。大人はいつの間にかストーリーを追ひ、絵本の絵を読む楽しさを忘れてしまっています。大人の感性は枯れているといってもいいでしょう。この感想文は、この絵本の持つ面白さを見抜いていました。この絵本をどれだけ楽しめるかが、大人になってどれくらい感性が枯れてしまっているかを計るバロメーターになっているといえまふ。

最後に、都城の幼稚園で、『めっきらもっきら どおんどん』(文:長谷川摂子、絵:ふりやなな、福音館書店)に取り組んだ年中児の保育実践から、絵本のすばらしさについてお話しさせていただきます。

このクラスの先生は、4月の年度当初、この一年は自然に親し

むというねらいを持ちました。ある日、園の横の梅林にある祠が「めっきら…」の祠とよく似ていたため、男児が「めっきらもっきら どおんどん」と盛り上がりました。翌日保育者が、今度は梅林の庭で読んでやると、男児が読んでいる途中で「先生ちょっと待って」と言って祠のところに行き、「しっかかもっかかがないかな」と探し出しました。その後の平均代台での遊びでは、「モモンガーッ」と言うように上手に出来る姿が見られました。またある日、おたからまんちんのビー玉だと言ってビー玉を渡し、保育者が「何が見える」と尋ねると、「お母さんがいた。布団干してる。ぼく、明日から早く起きよう」と言う子どもがいました。また、朝、友達のりさを泣かせてしまった子は、涙を流しながら、「りさちゃん泣いてる。りさちゃん、ごめんね」と、りさに謝りに行きました。

このように、絵本はファンタジーの世界だけけれど、読み手が一緒になって“リアル”な世界を体験できます。子どもは、ファンタジーとリアルな世界を行き来します。子どもにとってファンタジーの世界はリアルな世界であるのです。絵本と実体験が一緒になったときに、相手の心に子どもは気付き、すごい力をもつのです。そして、その体験の中で子どもの感性は育っていくのです。

このように、子どもにとって絵本はとても大事なものです。絵本はすばらしいものです。

(文責:松崎行代)

研究発表

■研究発表 A (C 校舎 C502) 座長：竹迫祐子・大橋眞由美

●絵本の中の「死・葬儀・墓」—命の教育の視点から—

水野智美 (近畿大学教職教育学部 准教授)

幼児期からの命の教育の必要性が叫ばれている一方で、死を通して命の教育を残酷であるとする大人が少なくない。日本では死をタブー視し、子どもに伝えようとしにくい傾向がある。しかし、子どもに命の大切さを認識させるには、命には限りがあること、命が無くなるとまわりの人々が悲しむことを伝えていく必要がある。その意味から、葬儀、先祖の墓参りが子どもに命について学ばせる有効な機会である。ただし、葬儀に参列したり、墓参りに行く機会がない子どももいる。死、葬儀、墓参りを描いている絵本を用いることによって、幼児は間接的にその情景や様子を知ることができる。そこで、本研究では死、葬儀、墓が絵本の中でどのように描かれているのかを明らかにする。

今回分析した絵本のうち、外国人作家の絵本の中には、葬儀の場面を詳しく描写し、死によってまわりの人たちが悲しむ様子を描いている作品が少なくなかった。また、死者の肉体はこの世に存在しなくなることを葬儀を通して知るが、自分たちの心の中に生き続けていること説いている作品もあった。さらに、墓は子どもが気軽に遊びに行き、死んだ人のことを思い出す場所として描かれている作品があった。

一方、日本人作家の絵本には、死や葬儀に関する記述をしている作品はあったが、詳しい説明はなく、まわりの人の様子や葬儀の意味について書いたものもなかった。また、ペットが亡くなった際に作った墓について描いていたものはあったが、身近な人の墓を描いているものもほとんどなかった。

●宗教絵本ではない『日蓮上人』講談社の絵本によるイデオロギーの呼びかけ

森 寛 (大正大学大学院文学研究科 比較文化専攻 研究生)

本発表では、内村鑑三の著書『代表的日本人』をサブテキストとして、1951年に発行された講談社の絵本『日蓮上人』にみられる国家のイデオロギーの呼びかけを考察する。

日蓮は、鎌倉時代の仏教界で独自の教説を展開し、僧侶の立場から鎌倉幕府の政治体制を批判した日蓮宗の宗祖である。その信仰に生きる姿勢は、人形浄瑠璃や歌舞伎狂言の演目にもなり、内村鑑三の著書『代表的日本人』などで高く評価されている。

普通、宗派が出版する仏教の宗祖伝絵本は、読者に宗祖の偉大さを教え、信仰の規範として宗祖の生き方を示す。それに対して、磯田長秋の絵と加藤武雄の文が語る『日蓮上人』は、宗祖を子ども読者の手本となる理想化された歴史的偉人として表現する。偉人伝の絵本は、孝行忠義・愛国心・立身出世といった思想を伝えるジャ

ナルとして、講談社の絵本の創刊当初から出版されてきた。その路線は、戦後の第2期シリーズに継承され、戦前になかった宗教者の偉人伝絵本『日蓮上人』の刊行に至る。

『日蓮上人』の物語には、正しい仏教の教えをひろめて日本一の僧侶になるという立身出世の思想がうかがえる。そこでの日蓮は、抵抗勢力からの迫害に遭いながらも己の信念を貫いて行動する精神主義の体現者として語られる。ところがこの作品では、日蓮という人物を表すうえで、最も肝心な部分が抜け落ちている。それは、宗教者の偉人伝であるにもかかわらず、日蓮が唱えた宗教的思想や政治的思想について言及する記述が一切ないことである。しかし、このような語りの欠落も、読者にむけたイデオロギーの呼びかけとなる。

戦後の『日蓮上人』もまた、国家のイデオロギー装置として社会を再生産するため、日本の社会に相応しい国民を作り出す。絵のスタイルや色彩、言語表現、レイアウトなどに織りこまれたイデオロギーは、欠落した語りからも読者に呼びかける。今回の発表では、この点についても論じていきたい。

●絵本の中の「障害・障害者」—障害理解の視点から—

徳田克巳 (筑波大学ヒューマンケア科学研究科 教授)

日本および海外で出版されている絵本には、点字や手話などの障害に関する内容や障害者が登場するものがある。このような絵本は幼児期における障害理解指導に有効に働くと考えられる。その理由として、次のことが挙げられる。

障害を理解する第一歩は障害者や高齢者、外国人など自分とは異なる特徴のある人がこの世の中に存在することを知ることである。しかもこのことを年齢が小さいうちから実感し、ファミリーリティを高めることができるように、伝えていくことが必要である。障害および障害者に関する内容が登場している絵本を子どもが日常的に目にするによって、これらのことが可能になると考えられるからである。

そこで、本研究では日本および海外で出版されている絵本(約200冊)を分析し、障害および障害者がどのように扱われているのかについて明らかにした。

日本で出版されている絵本には、障害者の日常生活を紹介しながら、障害の特性や状態を説明している作品が多く、マスコミ等取りあげられるように、障害児・者がけなげに一生懸命に生きてい



る姿、がんばっている姿を描いたものはほとんどなかった。ただし、潜在的な能力や得意分野を発揮する機会を通してまわりに認められていくという論調のものが少なくなかった。また、障害者が登場する絵本には、「肢体不自由」、「視覚障害」などの visible な障害を扱ったものが多かった。

海外で出版されている絵本には、障害に関する内容がテーマになっている絵本以外に、障害者が登場人物の 1 人として出てくるが、障害や障害者に関する内容に焦点があてられていないもの、本文の内容とは関係なく、挿絵の中に背景として障害者が描かれているものが数多くあった。

●バーバラ・クーニー後期作品における＜少女／女性＞像の「新しさ」－「わたし」のエイジェンシーはどのように描かれたか－

大町幸奈（千葉小学校教諭）

アメリカの絵本作家バーバラ・クーニーは、Chanticleer and the Fox(Crowell,1958)とOx-Cart Man (Viking, 1979)において、コルデコット賞を受賞している。Ox-Cart Manのように、近現代に失われつつある自然や景色を丁寧に描く創作姿勢などから、ネイチャーライターとしても親しまれている。

ただ、素朴で温かい印象を与えるフォークアートで描かれる「家族」や「田舎」は、読者に「過去」への郷愁を誘うものとしてのみ読まれてしまうことがある。もちろん、クーニーは、「守るべきもの」の価値も描いていた。だが、「変えていくべき」既存の価値構造に対して、＜声＞を発してもいる。

2度のコルデコット賞受賞によって、「(以前より)自由に描けるようになった」と語ったクーニーは、それ以降、＜少女／女性＞のエイジェンシーを描く作品を多く手がけている。全米図書賞受賞作 Miss Rumphius (Viking,1982)やパブリッシャーズ・ウィークリー誌年間最優秀絵本賞受賞作 Emily (Bedard, Michael. Doubleday,1992) などからは、クーニーが描く＜少女／女性＞像のリベラルさやラディカルさをうかがい知ることができる。

クーニー作品は、アメリカ絵本に一定の権威を与えるコルデコット賞を受賞した 2 作品の印象が先行するためか、穏やかな語り口と繊細な絵が表象する「懐かしいもの」が評価されることが多い。作品に描かれている＜少女／女性＞像の「新しさ」は、ときとして、こうした評価の影に隠れてしまうことがある。

本発表では、作品分析によって発見したクーニー作品が描く「新しさ」について紹介する。作品は、クーニー作品を理解するのに重要と思われる自伝的 3 部作 Miss Rumphius、Island Boy(Viking,1988)、Hattie and the Wild Waves (Viking,1990) を対象とする。

■研究発表 B (C 校舎 C503) 座長：生田美秋・阿部紀子

●梁川剛一の北海道版絵本について

柴村紀代、谷暎子、高橋晶子（日本児童文学学会北海道支部「ヘカッチ」同人）

梁川剛一（1902-1986）は、戦前「少年倶楽部」別冊付録「敵中横断三百里」（山中峯太郎・作）の挿絵で人気を博し、「講談社の絵本」には油絵で描いた「リンカーン」（池田宣政・文）や「世界名作物語」（講談社）の「巖窟王」「三銃士」「ジャングル・ブック」などの表紙、挿絵に彫刻で鍛えた立体的で躍動感にあふれたリアルな絵を描き、当時の子ども読者から熱狂的な支持を受けた。梁川が札幌に来たのは 1945 年 7 月、戦災で住まいを焼失したため妻の実家を頼っての疎開であった。1949 年 6 月に帰京するまでの 4 年間、梁川は積極的に道内の文化活動に携わった。戦後まもなくの札幌の出版界は東京の出版社や印刷所が戦災のため壊滅的な打撃を受けたため、一時期 127 社もの出版社が集中し、活況を呈した。梁川も戦後いち早く北海道で出された児童雑誌「北の子供」（1946 年 4 月創刊、1950 年 1 月終刊、全 38 冊 新日本文化協会発行）の表紙を手がける傍ら、札幌の口演童話家の塚本長蔵らとともに「エルム社」を創設し、毎月絵本や紙芝居を刊行した。梁川のエルム社での絵本は 17 冊、その他北海道出版社の絵本 2 冊を現在確認している。今発表では、これらの絵本を紹介し、北海道版絵本の特徴について考察したい。

●光吉夏弥研究(第 2 期)－＜岩波子どもの本＞絵本シリーズ編集・絵本翻訳の時代を中心に－

生駒幸子（武庫川女子大学 非常勤講師）

第二次世界大戦前から海外の子どもの本・研究所を蒐集し、戦中戦後のわが国における絵本翻訳出版に貢献した人物、光吉夏弥（1904 - 1989）の子どもの本に関わる仕事を調査する。第 1 期（＜岩波子どもの本＞までの仕事）は、絵本翻訳の黎明期ともいえるべき時代であった。太平洋戦争が始まりアメリカとの交戦の最中 1942 年に筑摩書房〈世界傑作絵本〉シリーズで『花と牛』〈ムンロー・リーフ作 ロバート・ロウソン画 光吉夏弥訳 1942. 2. 25〉、『フタゴノ象ノ子』（ホーガン作 光吉夏弥訳 1942. 2.25）2 冊を翻訳し、翌年 1943 年に『生活美術』第 3 巻第 9 号の「絵本特集」で（「絵本の世界」アトリエ社 1943. 9 (p 46-51)）において独自の絵本論を展開している。さらに日本少国民文化協会の文学部会幹事として、プロバガンダ誌「少国民文化」で翻訳や評論をおこなった。戦後は「岩波少年文庫」の準備段階で岩波書店が企画した「少年少女の読み物百種委員会」委員などを経て、1953 年 9 月から岩波書店の絵本出版に社外プレーンとして携わった。

その後の絵本出版の布石となった〈岩波の子どもの本〉に関して、光吉は「岩波の子どもの本（一）－その発行のころのことども」（月

刊絵本 1973.5 盛光社)、「岩波の子どもの本(二) —その発行のころのことども」(月刊絵本 1973.6 盛光社)で出版背景を語っている。このなかでも特に翻訳絵本は光吉の蔵書からの原書が多く、その選書は中心編集者であった石井桃子(1907-2008)と光吉の絵本観が投影されているといえる。白百合女子大学の光吉文庫に所蔵された資料をたどりながら、光吉が編集にかかわった〈岩波の子どもの本〉第4巻配本までと、その他の絵本翻訳や評論などの仕事を検証し、彼の絵本観と仕事が日本戦後絵本史のなかでどのように評価できるのか考えてみる。

●ページをめくる方向によって、語りのリズムが変わる

加藤純子(名古屋芸術大学人間発達学部 教授)

絵本は、同じ構図であってもページをめくる方向が変わると、表現される事柄が変化する。ここでは、右開きで展開する絵本が、同じ構図のまま左開きに変わることによって、語りのリズムが変わるということを明らかにする。考察の手がかりとして、縦組み右開きで展開する『ゴリラのパン屋さん』一白井三香子 作・渡辺あきお 絵 金の星社(以下、「金の星社版」と、ハングル語に翻訳されて横組み左開きで展開している以外は、終始「ゴリラ」の行動を客観的に捉える視点で描かれている。

語りの視点の違いは、語りのリズムの違いを生む。「金の星社版」では、物語が始まった直後から、「ゴリラ」の声や顔に驚いた客が逃げ帰る画面が3回繰り返されることによって、「ゴリラ」に対する同情が増加するというリズムが生まれている。それに対して「ハングル語版」では、「パン屋」を開店しながら、接客よりパンを作ることの方に熱心だという、「ゴリラ」の言動のズレを増幅しながら、自分が作ったパンを食べながら対策を考える「ゴリラ」のだらかさを浮かび上がらせるようなリズムを生み出している。

●『ぼくがうまれた音』にカンの虫の鳴き声を聞く

石井光恵(日本女子大学・教員)

『ぼくのうまれた音』(近藤等則/文 智内兄助/絵 福音館書店 2007)は、ジャズトランペッターの近藤等則と現代美術の作家智内兄助がコラボレートして作った異色の絵本である。一人の少年「ぼく」が生まれ成長し、やがて弟が生まれてくる。その日々が「少年を取り巻いた音」をキーワードに描かれる。幼いころのような音とそれにつわる風景に育まれて成長していったかを巡る展開で、耳をすませば、人が育つのにいかに身の回りに多くの音が存在するか、また、その音にかかわっていかに多くの風景が存在するか、あらためて考えさせられる。また、そうした音や風景がいかにその人のアイデンティティを形成させるかという、作者たちの主張に耳を傾けてもみる。

この絵本に興味深いのは、音につわる風景に登場するさまざまなモノたちである。例えば、始まり。胎児が胎内で聞いていた子宮内血流音とうずしおの音。その音があたかも聞こえて来るよ

うに、瀬戸内海来島海峡の渦巻く情景がオーバーラップして描かれる。

本発表では、その中の一場面、少年のカンの虫封じの話を取り上げて分析することから、モノのイメージが指し示す遠慮とそこから発する絵本の表現の可能性について考えてみたい。「ぼく」のカンの虫封じの場面に描かれるモノ。それは跳梁跋扈する妖怪たちである。この妖怪たちの出所については、『女と絵本と男』(翰林書房、2009)所収の拙論「絵本と男たちの饗宴—『ぼくがうまれた音』をめぐる」で、河鍋暁斎の『暁斎百鬼画談』(1889)であることをすでに明らかにしている。器物に魂が宿するという〈付喪神〉思想から来ている、古くは「百鬼夜行図」から生まれでたこれらの妖怪が、現代の絵本の画面に踊る時、絵本の意味が新たな展開を見せるように思われる。智内が絵本に再現した河鍋暁斎描く妖怪たちを詳細に検討することで、それらのイメージが膨らませていく絵本の時間・空間について考えていく。

■研究発表 C(C校舎 C507) 座長: 永田桂子・藤本朝巳

●佐藤さとの絵本研究—村上勉の絵を中心に—

内藤智津

佐藤さとる(1928年~)のデビュー作『だれも知らない小さな国』は、数々の賞を受賞し、現代児童文学の起点とされている作品である。佐藤氏の児童文学作品は「コロボックル物語」シリーズをはじめとし、ある程度の研究はなされてきた。しかし、絵本作品となると、研究の対象となっているものはほとんどない。管見によると、佐藤さとの絵本作品は26作品あり、そのうち、18作品が村上勉の絵によるものである。

「コロボックル物語」シリーズの挿絵は、最初は若菜珪のものであったが、佐藤の希望により、二作目からは村上勉が挿絵を画き、後に、一作目も村上により挿絵が画かれ、再版するに至った。また、続く「コロボックル物語」シリーズや、他の佐藤の児童文学作品の挿絵、そして、佐藤の絵本作品のほとんどが、村上の絵によるものである。そのことから、佐藤の物語世界が、村上の絵によって表現され得るものであったことが伺える。現在も読み続けられている、佐藤さとる作・村上勉絵の代表作としては「おおきなきがほしい」や「おばあさんのひこうき」があげられる。

なぜ、佐藤は村上の絵を採用し続けたのか。佐藤の物語が、なぜ、村上の絵によって表現され続けたのだろうか。村上の絵は線画が中心で、独自性のあるものだ。「コロボックル物語」では、挿絵として、表紙以外はほとんど色はつけられていなかった。絵本作品を分析することで、同じく線画ではあるが、色がつけられているため、村上の特徴をより明確に捉えることができる。また、村上の初期の作品から最近の作品への変遷にも注目し、検証する。

村上の絵の特徴を分析するとともに、彼の絵が、佐藤の物語世界をどのように表現しているのか検討したい。

●最終場面から考える西巻茅子の絵本

中川亜沙美、西脇由利子、廣田真智子、丸尾美保、万本光恵、渡邊万由美、三宅興子

（「こぐま社の絵本」研究会）

「こぐま社の絵本」研究会では、「こぐまちゃん」シリーズと並んでこぐま社を代表する絵本『わたしのワンピース』（1969）の作者・西巻茅子の作品について、メンバーが各自様々なテーマを持って考えてきた。今回の発表で取り上げるのは、最終場面についてである。最終場面のみ焦点を絞って比較・分析することにより、西巻の絵本の特徴が浮かび上がってくるのではないかと考えたからである。絵本のみならず、小説や映画などのあらゆる創作作品において、最終場面は重要なものとされている。読者が心から満足して絵本を閉じられるかどうかは、最後の1ページにかかっていると言ってもいいだろう。それゆえに、最終場面には、その絵本の持つ主題や作家の持つ個性が縮図として表れてくるのではないだろうか。

対象とするのは、『まこちゃんのおたんじょうび』（1968）から『のらさんと5ひきのこねこたち』（2007）までの、西巻が文・絵ともに手がけた26作品である。まずは、最終場面において、いつ、どこで、誰が、何をして終わっているのか、それらがどのような描かれ方をしているのかを分類し、西巻の絵本によく使われるパターンや手法を探る。たとえば、何をして終わるかということについては、幼年向けの絵本や児童文学の物語展開における一般的な終わり方である「(家に) 帰る」、そして「寝る」というパターンが、西巻の絵本にも多く使われている。では、そのパターンに当てはまらない絵本とはどのようなものであるか。或いは、一見ありがちと思われる終わり方であっても、何か他の作家の絵本との差異がないだろうか。そのような観点から最終場面をみていくことで、西巻の絵本の特徴や独自性を導き出し、また、こぐま社と他社の絵本における違いについても言及できればと考えている。

●『わたしのワンピース』論—その特質をめぐって—

西脇由利子、中川亜沙美、廣田真智子、丸尾美保、万本光恵、渡邊万由美、三宅興子

（「こぐま社の絵本」研究会）

こぐま社創立の初期に出版された作品のなかで、『わたしのワンピース』（1969）は、<こぐまちゃん>シリーズやく11ぴきのねこ>シリーズと共に現在も書店の書棚に並ぶ絵本である。こぐま社によって見出され、絵本作家となった西巻茅子は、他にも『まこちゃんのおたんじょうび』（1968）、『ふんふんなんだがしいにおい』（1977）など数々の作品を世に送り出した。そして、他作家とのコラボレーションでも『はけたよはけたよ』（神沢利子文 偕成社 1970）、『ちいさなきいろいかさ』（森比左志作 金の星社 1971）など子どもたちに親しまれている作品は多い。また近年では、『だっこして』（こぐま社 1995）をはじめとする<にしまきかやこあかちゃんの本>シリーズや言葉遊び等をテキストにした刺繍による

絵本『あいうえおはよう』『ぼくたち1ばんすきなもの』（共にこぐま社 2003）など新しい試みにも挑んでいる。

そのようにオリジナリティのある絵本創作に精力的に取り組んできた西巻の作品の中にあって、『わたしのワンピース』は、147刷 139万部（2008年12月現在）という数字が示すように、40年間にわたってその人気を維持し続けてきた。今日までの西巻作品の変遷を振り返って見ると、『わたしのワンピース』には他の作品に比べてユニークな要素が多いことに気づく。例えば、主人公は常に子どもと同じ目の高さで描かれ、ファンタジーの世界は宇宙にまで広がる。また、終始読者の期待を裏切らない意外性のある画面展開が繰り返され、一人称で書かれたテキストと相まって心地よいリズムを刻む。そして、結末の後姿は読者の心をさらに未来へと導く。それらは物語世界における独りきりの時間をこの上なく心豊かな満ち足りたものにしていく。

そこで本発表では、『わたしのワンピース』を指標に、西巻が絵と文を手がけた作品を中心に分析していくことにする。主人公像、図像表現、画面展開、物語構造、テキストなどに注目することにより、あらためて『わたしのワンピース』の特質を浮き彫りにする。そして、『わたしのワンピース』が西巻作品において、また時代においてどのような意味を持つものであったかについての考察を試みたい。

●『パンチとジューディ』における「グロテスクとユーモア」—ジョージ・クルックシャンク画：The Tragical Comedy or Comical Tragedy of Punch and Judyの場合—

浅木尚美（上智大学福祉専門学校 保育士科 教員）

〈パンチ & ジューディ〉とは、十六世紀のイタリアに登場した諷刺人形喜劇の名称である。現代に至るまで主にイギリスで人気を博しており、諷刺雑誌「パンチ」のタイトルの由来でもあり、創刊号の表紙を飾ったのもこの人形劇〈パンチ & ジューディ〉である。1828年、ジョージ・クルックシャンクが挿絵つけた脚本 The Tragical Comedy or Comical Tragedy of Punch and Judy（以下、『パンチとジューディ』）が出版された。

絵本画家の祖とされるランドルフ・コルデコットが活躍する半世紀ほど前に生き、同世紀でありながら、絵本画家としては、名を残すことができなかったクルックシャンクではあるが、当時のカーニバルの様子を描いた図像からは、多くの子どもがこの人形劇を楽しんでいたことがわかる。三宅興子は、「こどもの絵本の歴史を見ていくと教育・訓育を目的としたものとは明らかに違う別の系譜があることに気が付く。親・教師の与えたいものと、子ども読者の好みには、ずれがある。」（三宅、『もうひとつのイギリス児童文学史』）と述べており、暴力性が強く、訓育とは程遠い『パンチとジューディ』が当時の子どもに受け入れられていたことに着目した。クルックシャンクの挿絵の中では、荒削りな印象を与える『パンチとジューディ』に潜む風刺精神および「グロテスク・ユーモア」と子どもの興味の本质との関連を考察したい。三宅は、また、児童文学との関連が深

い「パンチ」の画家として、リチャード・ド・イル、ジョン・テニエル、アルフレッド・クローネル、C・H・ベネットを「もし子どもに支持された絵本の歴史が書かれたら取りあげられる作家」としてあげているが、クルックシャンクが後の絵本史への影響を与えた可能性にも言及したい。



■研究発表 D(C校舎 C502) 座長: 佐々木宏子・香曾我部秀幸

●絵本に表象された“暮らしのイメージ” —金井信生堂の創業期絵本(1908-23)を主として

大橋真由美 (大阪府立大学大学院人間社会学研究科院生 和歌山信愛女子短期大学非常勤講師)

絵本があり、子どもと家族がいる空間、すなわち「絵本空間」において、子どもにとって最も身近に感じられる図像は、子どもと家族の日常事に因んだテーマ、つまり“暮らしのイメージ”の表象と言えるだろう。それらは、家族によって子どもに絵解きされるととき、日常的な物語が付加されることの多いものである。つまり絵本に表象された“暮らしのイメージ”は、家族の絵解きによって、子どもにとってより一層身近なものとなり、さらに強い影響を与える可能性のあるものである。

さて、戦前期の絵本発行所としては最大手であった金井信生堂の創業期(1908-23)は、国家政策として近代化が推進され、近代家族が形成され、家庭教育が唱道された時期であった。叢書名には「教育」の文字が含まれ、裏表紙の目録には「各画伯が家庭教育の一助として…」の文言が記されており、金井信生堂の創業期絵本は家庭教育を意識したものであった。

「各画伯」と記されているものの、これらの奥付には、概ね画家名は記されていない。しかし、“作り手”が有名であれ無名であれ、その想像から生み出されたイメージは、視覚的な図像としてメディアに表象されたとき、個人的な意味に留まることなく、社会的に共有される意味を持つようになる。そのメディアが大衆的なものであればあるほどに、その社会的影響は大きいと言える。したがって、このような絵本に表象された“暮らしのイメージ”は、家庭教育のための役割を果たした可能性を指摘できる。

そこで本研究では、金井信生堂の創業期絵本を事例として、そこに表象された“暮らしのイメージ”を分析することを通して、どのような社会的意味を持つ情報が「絵本空間」に提供されていたかを検討する。具体的には「都市の風景」、「乗物の近代」、「絵本の中の住空間」、「絵本に見る家族イメージ」に焦点を絞り、図像を提示しながら、その意味を分析し、それらが提供したであろう情報を考察する。

●家族関係の変化と絵本細部を見る楽しみ—「バムとケロ」シリーズを通して—

神戸洋子 (帝京大学こども学部こども学科 教授)

近年、親子関係に変化が生じている。“友だち親子”という感覚は、生活を共に楽しむことにも通じている。

その一方で、子どもが理解できないと親自身もまた、不安感の中で子どもを忌避する時代であることも事実である。

島田ゆかの「バムとケロ」のシリーズの、こわかわいい犬のバムとカエルのケロちゃんは保護者と子どもと読むことが出来る。ケロちゃんは、よくいたずらをする。トイレトペーパーを、ぐるぐるど何にでも巻いてしまうなどという遊びは、保護者である親は思い当たることのひとつだろう。

こうした、子どもの好奇心あふれるいたずらを、叱るのではなく一緒に楽しんでしまう感覚のあふれた絵本が「バムとケロ」のシリーズである。これは読み手の側に立つ保護者にとっても、ああ、こんなふう楽しんですごすことも出来るのだ、友だち親子でもいいのだと心地よい安心感を与える。

そこに描かれているのは、違う種族のカエルである。これが人間の親と子であったら、このようなホノボノ感は生じない。また、子どもが自分と同じ人間には見えないという親の側の悩みは、少女漫画『イグアナの娘』(萩尾望都)が先取りしていた問題であるが、ここまであっけらかんと表現されれば、別の価値観で生きている存在だと納得することも出来る。子育てが楽になり、楽しむことが可能となる。

保護者でありながら、友だちという関係を許容してくれる絵本を子どもと共に楽しむこととなる。その細部をながめ多くの物語を絵本の細部から引き出す作業は、親子の会話も盛んにしてくれる。ストーリーが円環するといったポストモダン絵本の楽しみも含め、親子ともどもに楽しめるシリーズであると同時に家族観の変化も取り込んだ絵本といえよう。

●子育て支援に参加する親子の絵本との関わりに関する研究

—子どもの成長を見つめる親の視点から—

諸井泰子(有明教育芸術短期大学こども学科)

本研究は、本学子育て支援事業“親子サロン”に参加する 43組

の親子を対象に、親子サロンと家庭での絵本の関わりを調査し、両者の関連が子どもの成長にどのように影響したかを母親の視点で捉え、子育て支援が果たす役割を検討するものである。調査方法は、家庭での関わりは母親に質問紙調査を行い、親子サロンでの様子は自然観察と保育者の活動記録、および参加時に保護者が記述する「感想シート」を用い、内容を分析した。

家庭への調査の結果、子どもへの最初の読み聞かせは生後1~2ヶ月が最も多く、その理由に「子どもの成長に必要なと思った」を挙げていた。また母親は、子どもは絵本が好きであると認識しており、ほぼ毎日、子どもに読んでといわれたときに15~30分、3~4冊の絵本を読んでいることが分かった。家庭では生後間もないころから子どもに絵本を見せ始め、子どもの意思を尊重しながら日常的に関わりを持たせていることから、母親が子どもと絵本との関わりを子育ての主要な部分と捉えていると考えられた。また、親子サロンでは、家庭での関わりを反映して絵本に興味を持つ子どもが多く、自発的に本棚に足を運ぶ。保育者の読み聞かせ時には、保育者の前に座って見る、発話する、指差しなど体を動かさず、絵本に興味を示さず保育室内を動き回るなど、さまざまな子どもの姿が見られる。このような子どもの様子に対し、母親の多くは、子どもが「集中して見聞かしている」「最後まで見聞かしている」ことを成長の姿と捉えていた。

以上の結果から、母親は子どもの成長過程と絵本との関わり方の変化に関心を寄せ、絵本が子どもの成長に影響すると実感していることが明らかとなった。特に「読み聞かせ」という集団での経験を重視し、聞く態度や様子を成長と関連付けている。母親の心情と子どもの姿を見極め、親子で絵本を楽しみ、子どもの成長に喜び見出せる場と機会を支えることが子育て支援の役割として示唆された。

●青山台文庫の「だっこでえほんの会」の8年間を通して「子ども—絵本(読み手)—母親」の関係を考える

正置友子(青山台文庫)

大阪の北部にある千里で青山台文庫をスタートしたのは1973年であった。35年間、子どもたちと絵本、詩、物語を読んできた。その過程で、0歳からのあかちゃんたちと絵本を読む「だっこでえほんの会」を始めたのは2001年であった。最初の年は、0歳だけの対象であったのが、1歳児組ができ、2歳児組ができ、月に2回の午前中、0歳、1歳、2歳の3クラス子どもたちと絵本を読むようになった。「だっこでえほんの会」を卒業した子どもたちは、その後、毎週午後に関催している文庫に来てくれる。同じ子どもたち(必然的に同伴者である母親たち)と3年間絵本を読むというお付き合いをしてきたことから見えてきたことは多くあるが、今回の発表では、幼い子どもたちと共に参加して下さっている「おかあさんたち」に焦点をあてて考察を試みたい。

「だっこでえほんの会」を始めたとき、主催者の開催の意図は、あかちゃんと絵本を読むことであって、母親は、あかちゃんの養育

者であり、あかちゃんを抱っこしたり、ベビーカーに乗せたりして、会場まで連れてきてくださる人であり、催しの主人公はあくまでもあかちゃんたちであって、母親は同伴者に過ぎなかった。しかし、3年ほど経過した頃から、子どもたちの変化はもちろんのことだが、おかあさん達の変化を感じるようになった。母親たち自身が、幼いわが子と絵本をシェアすることも大きな意味を持つだろうが、社会的な立場で、母親がわが子を抱っこしたり、並んだりして、わが子と共に絵本を見る(聞く)位置にいることも意味があるのかもしれないと思うようになった。また、「だっこでえほんの会」の最後に、幼い子向けというよりは、おかあさんたちにむけて絵本を一冊紹介していることも、なんらかの意味があるのかもしれない。

本発表では、「だっこでえほんの会」に参加して下さっているおかあさん達の姿を通して、母親がわが子と横並びで絵本に出会うことの意味を考えてみたい。

■研究発表E (C校舎C507) 座長: 三宅興子・石井光恵

●「絵本」は「幼稚園教育要領」の中でどのように謳われているか

細川七重 (関西学院大学大学院 研究員)

筆者は、「日本の幼稚園史における絵本」を研究している。

日本における幼稚園の歴史は、1876(M9)年11月16日に開園した東京女子師範学校附属幼稚園(現お茶の水女子大学附属幼稚園)から始まっている。

133年の時が流れた現在、幼稚園における教育は幼稚園教育要領に基づいて保育されている。幼児教育に対する国の政策の変遷の中で絵本がどのような位置づけであったかをみていきたい。

1871(M4)年に文部省(現文部科学省)が設置され、1872(M5)年に「学制」が公布され、日本の近代教育制度が始まった。東京女子師範学校附属幼稚園開園時には、絵本はまだ謳われていない。

その後、1879(M12)年に「学制」が廃止され「教育令」が制定されたが、ここでも絵本は謳われていない。1886(M19)年に「小学校令」が公布される。1899(M32)年に「幼稚園保育及設備規程」が制定され、保育項目が定められた。保育項目の中に「談話」が挙げられ、「言語ヲ練習セシム」とある。1900(M33)年に「小学校令施行規則」が制定され、1899年と同じく「談話」で「言語ヲ練習セシム」コトヲ要ス」とある。1926(T15)年に「幼稚園令施行規則」が制定され、保育5項目(遊戯、唱歌、観察、談話、手技)となる。新しく加わった「観察」を受け、「観察繪本キンダーブック」が翌年創刊された。1948(S23)年に「保育要領」(正式の学校教育の出発点)が刊行され12の保育内容の6番目に「お話」が挙げられ、「絵本」という言葉が初めて登場する。1956(S31)年に「保育要領」を改訂し、「幼稚園教育要領」として示され、「言語」(6領域)となる。

以後、「幼稚園教育要領」は1964(S39)年に改訂される(6領

域)。その後、1989(H2)年に改訂され、「言葉」(5領域)となる。さらに、1999(H12)年に改訂(5領域)。そして、昨年2008(H21)年に改訂された(5領域)。

以上、「幼稚園教育要領」の改訂を通して、教育問題、社会問題、家庭と幼稚園の関係等を関連させ、絵本の扱われ方の歴史を検証していく。

●幼稚園における集団への絵本の読み方が幼児の身体的反応に及ぼす影響

並木真理子(有明教育芸術短期大学)

保育の現場において、絵本は言語領域、表現領域の重要な教材としておかれ、集団に対する絵本の読み聞かせによる共有体験や保育者の読み聞かせの実践方法の重要性が先行研究の事例分析から示唆されている。また、玉瀬(2008)は、保育専攻学生に対して読み聞かせの速度による絵本のイメージの変容の有無を調査し、その結果、読む速度と場面の明暗が関係することを示し、場面の明暗にあった速度の読み聞かせ方を示唆している。

本研究では、幼稚園の集団に対する読み聞かせ場面において、「淡々と読む」ケースと「抑揚をつけて読む」

ケースに対して、幼児がどのような身体的反応・言語的反応をするのかを観察・記録し、分析を行

った。対象は、東京都の公立幼稚園2園、4歳児2クラス、5歳児2クラスであり、そのクラスに集団

での読み聞かせを行ったことのない絵本「かいじゅうたちのいるところ」(モーリス・センダック作 じ

んぐうてるお訳 富山房 1975)を使用した。小平(2007)の反応カテゴリーを参考に、身体的反応、言語

的反応のカテゴリーを作成し、保育士幼稚園教員養成校の学生(2年生)4名による行動観察を場面見

本法により行った。その結果、以下のような身体的反応・言語的反応がまとめられた。

① 4歳児における身体的反応は、「淡々と読む」ケースでは、「じっと見る」行動反応は絵本の後半になる

ほど頻度が多くなり、「抑揚をつけて読む」ケースでは、一般的に「じっと見る」行動反応が多く見られ

「よそ見」「姿勢を変える」「体を触る」行動反応は、両ケースにおいて同様に表れた。また、言語的反応は「淡々と読む」ケースの方に多く表れた。

② 5歳児における身体的反応は、「淡々と読む」ケース、「抑揚をつけて読む」ケースの両ケースで、「じ

っと見る」行動反応、「よそ見」「姿勢を変える」「体を触る」行動反応が同様に表れた。「笑う」行動反応は、「抑

揚をつけて読む」ケースで顕著に表れた。また、言語的反応は、「抑揚をつけて読む」ケースの方に多く表れた。

●ブックスタートと子育て支援—北海道における取組を通して—

梶浦真由美(元 北海道文教大学短期大学部 助教授)

ブックスタート事業は、1992年、識字率や学力の低下が大きな社会問題となっていたイギリスで始まった。日本には、2000年の「子ども読書年」を契機に紹介され、翌年12の自治体で実施されたのが、2009年2月末現在、全国の約4割にのぼる687の自治体で実施される一大事業となっている。日本型のブックスタートの基本理念は、「赤ちゃんとお本を通して楽しい時間をわかちあうこと」で、そのねらいは、学力保証や早期教育ではなく絵本を介して親子がコミュニケーションを深め、さらに赤ちゃんの成長を暖かく見守るコミュニティの子育て支援として位置づけている。

しかし、2001年12月「子ども読書活動推進法」の公布・施行を受け、北海道では2003年11月「北海道子どもの読書活動推進計画」が策定されたのに伴い、以後ブックスタート事業は、家庭における読書活動の基本として位置づけられている。このような流れは岩手県でもあり、武田は、同県での実情を明らかにし、法律の公布などの影響もあり子育て支援の性格が薄れ、読書指導として受け取る保護者が増えていると指摘している(第61回大会日本保育学会発表要旨集2008年)。また、近年、絵本の読み聞かせと学力との関連が注目されるようになり、本来の事業の目的とは異なった方向への動きも危惧される。

筆者は、日本型ブックスタートは、もともと読書推進が底流にあると推測する。しかし、子育て支援の一環として明確に位置づけ具体的支援策を講じることで、より多くの人々に支持され、さらに広がりをもった事業としての展開が可能になるのではないかと考えている。ブックスタート事業の先進地である恵庭市における調査結果やユニークな取り組みをしている白老町での実践を通して、子育て支援としての今後のブックスタート事業の方途を探ってみたい。

ラウンドテーブル

■ラウンドテーブル1

ハンディキャップ絵本の動態をめぐって

話題提供者：星川ひろ子氏(写真家・絵本作家)

岩田美津子氏(てんやく絵本ふれあい文庫代表)

コーディネーター：舟橋 斉(京都女子大学短期大学部 教授)

今学会のメインテーマは、「絵本と子育て支援」である。このテーマと関連して、ラウンドテーブル1では、「ハンディキャップ絵本の動態をめぐって」をテーマに議論したので、その内容について報告することとする。そもそもメインテーマである「子育て支援」のねらいは、大別すると、子ども自身が育つ成長、親が子どもを育てる育成、親子が共に育ち合う共育、そして子育ての育児環境などへの4つの支援がある。この中で、絵本は、成長、育児、共育と深く関連しながら、育児環境の一つとして位置づけられる。絵本に関しては、近年、その表現方法、製作方法、流通機構などといった絵本環境は年々進化した。絵本基盤を確立し、絵本人口も拡大しているかに見られる。しかしながら、この状況は、市場主義の原理に左右され、需要率が高く、利益に結び付く方向へと偏りがちの傾向は避けられない。この市場主義に反して、強い要望がありながら、なかなか供給されない分野の絵本も少なくはない。その中でも、最もこの状況を強く反映しているのがハンディキャップ絵本と思われる。強いニーズに呼応して、ハンディキャップ絵本への取り組みは様々な形で試みられているが、決して十分な広がりが見られるとは言えない。

今回は、今日の絵本界において、ハンディキャップ絵本はどのような位置づけにあり、出版状況はどうなのかなど、ハンディキャップ絵本の現状を明確に把握するために、子育てと絵本とのかかわりが最も深く、ハンディキャップ絵本の代表的な立場で活躍されておられる星川ひろ子氏と岩田美津子氏に話題提供者となっただき、可能な限り不明であったり、曖昧であったりする部分を明らかにできるように、お話しいただき、出席者全員でテーマを深めていきたいと考えた。

ハンディキャップ絵本という用語以外に、障害児(者) 絵本、バリアフリー絵本、ユニヴァーサルデザイン絵本など様々な用語が存在することは承知しているが、用語の使い方については敢えて取り上げず、ここでは、ハンディキャップ絵本という用語に統一して、話を進めることにする。また、話題提供者のお二人には、事前にお話の大枠を決めてお話ししていただくことにしている。

最初に、星川ひろ子氏から、①ハンディキャップ絵本とかわることになったきっかけ ②星川氏の立場からみた子育てと絵本との関係 ③ハンディキャップ絵本への思い ④ハンディキャップ絵本の現状と課題などについて話していただいた。

<星川ひろ子氏のプロフィール>

星川氏は、『ぼくたちのコンニャク先生』で日本絵本賞とけんぶち絵本の里大賞を受賞されるなど、日本を代表する写真絵本作家である。その後『ぼくのおにいちゃん』『となりのしげちゃん』『ちえちゃんの卒業式』『ゆいちゃんのエアメール』『みえないってどんなこと?』など、次々とハンディキャップの絵本を出版している。一方で、絵本学会機関紙『BOOKEND2009』の中の「最新の絵本動向」で、「国内絵本ベスト5」と「各分野の注目作」に『しゃしんであそぼりとりあそび』が高く評価されるなど、ハンディキャップ絵本以外でも『あかちゃんてね』『竹とぼくのおじいちゃん』『しょうたとなつとう』『たま また たま』など、他にも多数のユニークな写真絵本をご主人と共に作っておられる。

① 子育てと絵本、ハンディキャップ絵本とかわることになったきっかけ

そもそもは、写真家としてのスタートで、当初は造形の世界を写真という手段で絵本に持ち込みたいという思いがあった。1973年に写真の個展を開いたのがきっかけで、『だれのかお』を出版することになり、その後も、造形を主体とした何冊かの絵本を製作する過程で、「絵本はいいものだ」との思いに至った。そこで、ある編集者に「障害の絵本を出したい」と提案するも、「絵本は子どもに夢を与えるもの」「子どもに障害を語る必要はない」と一蹴される。このような苦難を経た末に、初めてのハンディキャップ絵本『ぼくたちのコンニャク先生』の出版の機会に遭遇する。しかし、この時も、様々な紆余曲折があり、長い時間がかかった末に、最終的に小学館からの出版にこぎつけた。この中から得た教訓は、ハンディキャップ絵本はだれからも理解されるものではなく、最終的には障害に関心と理解をもっている人によってしか作られないということであった。『ぼくたちのコンニャク先生』は大人の近藤先生をモデルに作られたが、どうにかして子どもを主人公にした絵本を作りたいと思い、ダウン症協会のメンバーの1人の編集者に相談したところ、「あなたは子どもたちを食い物にするのか」「自分の子どもで作ればいいだろう」と言われ、この言葉が「パスポート」になって『ぼくたちのコンニャク先生』が誕生した。

②ハンディキャップ絵本への思いと課題

「絵本の中でもいいから、ハンディを持った人に出会って、ハンディキャップについて知って欲しい。かわりにくい本かもしれないけど、子どもにも是非見せてほしい。様々な想像力を働かせて相手のことを理解することで、その人を豊かにする。ハンディキャップの絵本がそんなきっかけになってくれたらと願っている」など星川氏のハンディキャップ絵本に対する熱い思いが語られた

「現在、残念ながらハンディキャップ絵本は、そのこと自体がハンディキャップになっているのかもしれない。『さっちゃんのまほうのて』や『はせがわくんきらいや』、そして『わたしいややねん』のように、ハンディキャップというバリアーを超えて、普通の本になって欲しい」とも語られた。

続いて、岩田美津子氏に①絵本とかかわることになったきっかけ ②岩田氏から見た子育てにおける絵本の役割 ③視覚障害者としての絵本への思い ④ハンディキャップ絵本の現状と課題などを中心に話題を提供していただいた。

<岩田美津子氏のプロフィール>

岩田氏は、1984年に「点訳絵本の会・岩田文庫」を創設され、1991年に文庫の名称を「点訳絵本・ふれあい文庫」に改称され、その代表として、目の見えない人も見える人も共に楽しめる絵本作りと普及に取り組んでおられます。1987年には、郵政省に働きかけ、点訳絵本の郵送料無料化を実現させられました。98年にはIBBY朝日国際児童図書普及賞を受賞されています。『見えないお母さん絵本を読む』、『点訳絵本の作り方』、点字付き絵本『チョコキョキ チョッキン』、『岩田美津子の絵本探検』など著作が多数あります。

(1) 絵本とかかわることになったきっかけ

子どもに「絵本を読んでくれ」とせがまれたのが、絵本との出会いであった。しかし、それは「出会い」と言うよりも、むしろ「絵本と言う壁にぶつかった」という方が正しいかもしれない。その壁にぶつかって思ったことは、「見えないから読んでやれない」ではなく「見えないけど読んでやりたい」ということであった。

(2) 岩田氏からみた子育てにおける絵本の役割

一般的なことで言えば、親子が寄り添って絵本を楽しむ中で、子どもは親の肌のぬくもりと、愛情を受け取って育つ。それと同時に、思考力や想像力、表現力が自然に身に付き、大人になって、社会人として生きていくときに、自分の人生を切り開く大きな力になるのである。一方、親が視覚障害者であった場合、さらに、文字や色などに子どもが興味を示しはじめた時にこの点訳絵本が大変役に立っている。親が見えない場合、子どもがいろんなことに興味を示しても、危険な物や、遠くにあって、さわることができない物は、教えてやるることができない。その点から言っても、点訳絵本はその助けになっている。

(3) 視覚障害者としての絵本への思い

晴眼者がごく当たり前のように、近くの書店で絵本を購入したり、地元の図書館を利用して、沢山の絵本を親子で楽しんでいるように、目の見えない親であっても、地域にあって、同じように書店や公共図書館で絵本を選んだり、親子で楽しんだりできる環境が整って欲しい。

(4) ハンディキャップ絵本の現状と課題

現状から言えば、絵本は、毎年1000点以上出版されている中で、点字付き絵本は1年に1冊も出版されていない。そんな中で、2002年に「点字付き絵本の出版と普及を考える会」が発足して以降、3社から6冊の点字付き絵本が出版されたことは、この社会における大きな動きと言える。

課題としては、この動きを今後どうやって広めていくかである。点字付き絵本はコストも高く、売れなければ、出版社は次の本を出



せない。公共図書館や学校図書館が必ず購入してくれるという仕組みがあれば、出版社も安心して出せるし、先述した、視覚障害者が望む環境も整うことになるのである。もっと多くの方が、そのことに目を向けていただきたい。

以上、2人の話題提供者の話を受けて、討議に入る前に、コーディネーターの方から、障害に関する絵本には、さまざまな用語が使われているが、この席では、特に用語の統一はしないが、とりえずハンディキャップ絵本という言葉を使う旨伝えて、時間不足のため能率的な討議をお願いした。

討議の内容は、絵本を読むときのハンディキャップのある人とかかわり方とか、絵本を読むときの留意点など、小学校、幼稚園、保育園などの現場からの基本的な質問に終始し、今回の主目的であるハンディキャップ絵本の現状についてとか、今後の方向性などにまで話を発展させるだけの時間はなかった。

最後に、2人の話題提供者から、一言ずつまとめの言葉を発言してもらった。星川氏からは、「ハンディキャップ絵本は、多くの方の読んでいただかないと、ハンディキャップのことが理解されないで、特別なものとしてではなく、ごくごく普通に扱ってほしい」という要望があり、岩田氏からは、「出版物は、売れないと作られていかないので、ハンディキャップ絵本は様々な図書館でも確実に置くように努力して欲しい」という提案があった。

今回のラウンドテーブルを通して、ハンディキャップ絵本の置かれている厳しい現状を再認識するとともに、ハンディキャップ絵本が広く理解され普及していくためには、特殊なものとしてではなく、ごく当たり前の存在として一般化されていく必要性が強調された。つまり、ノーマライゼーションへの道筋をつけ、いかにバリアフリー化していくかが今後の大きな課題であることが提案され、まとめられたと思う。今回のテーマ設定は、このような意味からいって、ささやかな一歩であったかもしれないが、今回の試みが起点となって、この小さな試みの積み重ねの継続が、今後の展望を開いていくことを強く願いたい。

(文責 舟橋斉)

■ラウンドテーブル2

ロシア絵本からなにをもらおう？(ロシアの絵本作家たち)

話題提供者：伊藤元雄氏(「ブックグローブ社」編集者)

千葉美香氏(「偕成社」編集者)

山崎タチアナ氏(名古屋大学他ロシア語講師)

中村久美子氏(ストーリーテラー・朗読家)

コーディネーター：田中泰子(ロシア児童文学・文化研究会「カスチョールの会」主宰)

田中泰子：「カスチョールの会」の本拠地で全国大会が開かれ、このラウンドテーブルが設けられて大変嬉しく思っています。ご存知のように、ロシアは1917年から74年間社会主義国で、絵本文化のあり方も日本とは違っていました。ソ連型絵本文化の中で育てられた子どもが何を手に入れ、何を失ったか見極めることは、今とても大事なことだと思います。

「カスチョール」創刊号で私達は1985～90年の日露の児童書出版状況を報告しました。日本では、日本の作品以外に23.1%を欧米ものが占め、ロシアと近隣アジア諸国の作品は、いずれも0.8%でした。日本の児童書出版がいかに欧米のものに偏っていたかがわかります。ロシアものがマイナーなのは、社会体制の違いや、ロシアが常に100～200もの民族を抱えた複雑な多民族国家であったこと、平和条約が結ばれていないといったことも影響しているでしょう。けれども、数少ない「ロシアもの」の中に、「おおきなかぶ」、「てぶくる」、「マーシャとくま」、「しずかなおはなし」、「3びきのくま」のような古典的作品が少なくないことも事実です。

「売れるものをつくる」という利益第一主義的な制約から自由だったソ連期のロシア絵本文化は、絵本のあり方や可能性、絵本と子どもとの関係を考えるうえで新鮮な視点を提供してくれるのではないかと思います。例えば、ロシアの絵本は、しばしば起承転結がないとか、暗くて面白くないとか、挿絵が素朴すぎるなどと言われます。千葉さんは、あるロシア関係の絵本を出版する際に、ロシア人画家が描いた寂しげな絵を、日本で売りにくくなるとわかっていながら、彼の希望通り、変更なしに表紙に使いました。また伊藤さんは、飾り文字の美しいロシア絵本を翻訳出版する際に、訳者の求めに応じ、経費を追加して日本語版用の飾り文字を挿絵画家に新たに描きおろしてもらいました。こうした方々の選択や判断は、ロシア絵本の魅力を日本の読者に伝え、日本の絵本文化をより豊かにする大きな力になるように思えます。18年前にソ連邦が崩壊して資本主義国の仲間入りをしたロシアでは、出版の自由や読者の選択の幅が広がったはずですが、絵本文化の発展という点ではまだ見るべき成果に乏しく、過渡期特有の混乱や極端な形での商業主義が目立ちます。ソ連期も今も、それぞれの良い点と問題点があるわけですが、ソ連邦崩壊前後で大変コントラストの強いロシアの絵本文化は、多くの示唆に満ちています。そんな経過や状況を念頭に置きながら、ロシア絵本の特徴を3つほど挙げてみます。

第1の特徴は、民族の根っこと言える^{フォークロア}口承文芸の占める割合が非常に大きいことです。革命前は識字率が極めて低く、児童文学に類するものは、口伝えされる昔話や童歌以外はごくわずかでした。

革命後に絵本が普及した後も、^{フォークロア}口承文芸を題材にしたものは学齢前児童用読み物の3分の1を占めました。人々の中に口承文芸がしっかりと定着していたので、昔話をベースにしたアルファベット絵本なども作られています。^{フォークロア}口承文芸の重視は、児童文学作品における「ひびき」やリズムの重視にもつながりました。

2番目の特徴は、19世紀ロシア文学の伝統である「他人の痛みを共有する」という精神です。童詩作家のチュコフスキイは、こうした思想は「教えなければ身につかず、それができるのは優れた文学、特に^{フォークロア}口承文芸だ」と言っています。

3つめの特徴は、「幼い頃から本物の文学作品や芸術性の高い挿絵に触れさせる」という考え方です。マーヴリナ&コヴァーリ共作絵本シリーズなどはその見本と言えるでしょう。

では、ここでレーベジェフの挿絵でも有名なマルシャークの「しずかなおはなし」を中村久美子さんとタチアナ先生にそれぞれ日本語訳と原語で朗読していただき、その後、話題提供者の方々にお話を伺いたいと思います。

(朗読)

山崎タチアナ：私はまず母から童歌や昔話をたくさん聞きました。母はウクライナ語、ロシア語、ポーランド語を少しずつ知っていたので、いろんな種類の童歌をその時々3つの言語で歌いました。母が家事をしながら歌っていた歌が、今私が家事をするときにも、自然と口をついて出てきます。母が話してくれる昔話に出てくる表現も我が家の日常生活に入り込んでいました。例えば、ピロシキを食べる時は必ず「マーシャとくま」の^{シェードク・ナ・ベレニョーク・スワイエム・ピラジョーク}「切り株に座ってピロシキを食べる」というくまのセリフが口にのぼるといふ具合に。田中先生がおっしゃったように、私達には^{フォークロア}口承文芸のイメージが定着しているのです。

私はスターリン独裁期の直後に生まれましたが、民衆は様々な干渉を上手にくぐりぬけて生きていました。そういう力を与えてくれたのも^{フォークロア}口承文芸です。例えば、「おおきなかぶ」で、おじいさんがかぶをひっぱって、おばあさんがおじいさんを引っっぱって、という「かぶを」、「おじいさんを」の「～を」を表す前置詞「ザ」は、「…のせいで／…の罪で」など、根拠や原因を示す場合にも使います。「おおきなかぶ」を読みながら、大人は、「おじいさんはかぶのせいでしょうっぴかれ、おばあさんはおじいさんのせいでしょうっぴかれ…」と連想するわけです。それも「芋する式」に。スターリン時代には理由もわからず逮捕された人が大勢いましたから。^{フォークロア}口承文芸は私たちの中で隠喩や暗喩の文化を発達させたので、そのものズバリを言葉にしなくても「山!」「川!」などの暗号のように理解することができたのです。

千葉美香：私は普段から訳者や画家と直接会って話し合い、本を作るようにしていますが、「ハリネズミと金貨」という絵本は、画家がオリシヴァングというロシアのアニメ作家で、直接会えない中でやりとりは大変でした。たとえば、このお話はハリネズミが冬ごもりする直前の秋から初冬にかけて展開しますが、校正刷りを見た画家さんが「もっと暗くしてください。ロシアのこの時期の陽射しはこんなに明るくない」などと言ってくる。印刷所に伝えても、「はあ…、ロシアの夕暮れの陽射しですか…」と印刷所の人も困



ってしまう。私もその人もそれがどんなものか知らないのですから。普通、校正は2回ですが、この作品はオリシヴァングさんのOKが出るまで4回出しました。そしてやっと完成した本を送ったら、「もうちょっと暗い方が良かった」…ガーン！です。

「ワニにながおこったか」は、同じくオリシヴァングさんのイラストですが、この本を出そうとした時、上から「なぜロシアなのにクマじゃなくてワニなんだ？」という意見が出ました。チュコフスキ以来ロシアの児童文学にはワニがよく出てくるのですが、理解してもらうのに時間がかかりました。この絵本の表紙ですが、当初オリシヴァングさんは夕焼けの中を飛ぶワニの周囲にピンクの花を描いていました。けれどその後で、「前のは装飾的すぎて、作品の内容やドラマを表現する深さが無い」と言って、こちらの暗い表紙を送ってこられました。こちらではワニが飛んでいるようにすら見えません。でも、オリシヴァングさんがそこまでおっしゃり、自ら描き直されたのに、「日本では前の方が売れやすいと思う…」とは言えませんでした。社長も私も悩みましたが、結局この暗い方を選びました。

その次のチュコフスキ・シリーズでは「ゴキブリ大王」の挿絵をペテルブルグの画家オストロフさんをお願いしました。オリシヴァングさんと仕事をして、ロシアの作品はやっぱりロシアの絵描きさんに描いてもらった方がよいと思うようになったのです。異なる文化を理解し認めあって共に生きていくことは、とても大事だと思うのです。

伊藤元雄：私が昔働いていた出版社で世界昔話全集を瀬田さんと光吉さんの編集で出した時、私達は、原語から訳せる人に訳を頼むことと、現地の画家の挿絵を使うことを原則としました。そしてその時にこのロシア昔話集「飛ぶ船」を田中さんに訳してもらいました。当時はロシアや東欧のものは大抵、英語やフランス語からの重訳でした。福音館書店からロジャンコフスキ画の絵本が出たとき、瀬田さんが「絵はいいんだけど、やっぱりどこかちがうなあ」と言っていたことを思い出します。

未だに僕はロシアものの出版を続けていて、最近もマーヴリナ&コヴァーリ絵本シリーズから3冊目の「つる」を出しましたが、僕

にとってロシア作品出版の原点となったのは、この「飛ぶ船」でした。それにしても、マーヴリナはよく日本語版のために、平仮名やカタカナの飾り文字を描いてくれたと思いますよ。これは、すごいことです。

参加者：ロシアでは、今でも童歌や昔話などが語られているのでしょうか？

タチアナ山崎：何世代かがいっしょに住んでいた以前と違い最近では核家族化も進み、口伝えというよりは、やはり、主に本からでしょうね。

参加者：ソ連期のロシアでは、国の方針に合わない作品が出版されたりするとどうなったのでしょうか？

田中泰子：RGCの田中友子が、ラチョフが着衣の動物を初めて描いた時のことを「カスチョール」誌に書いています。国立児童文学出版所の編集会議で問題になり、9ヶ月間議論が続いたそうです。風刺的要素が強く感じられる着衣の動物を、皆、危ないと思ったのでしょう。結局、出したそうですが、こうした政治的深読みや自主規制はソ連期にはよくありました。

参加者：RGCの田中友子です。ピアンキの孫に聞いた話ですが、ピアンキが^{フルシ}甲虫が登場するお話を書いたとき、それがフルシチョフへの風刺・批判と勘ぐられ、出版してもらえなかったそうです。また、第二次大戦中に「虫の戦争」という作品を書いたら、人間が戦争をしている時に不謹慎だということでこれも出版できなかったと聞きました。でも、こうした言論統制は日本にもありましたね。ソ連期の検閲の問題はかなり複雑で、思い込みや偏見で単純化するのではなく、ひとつひとつ丁寧に調べて判断する必要があると感じています。

千葉美香：子どもはまっ白な状態で、なんでも吸収します。大人の先入観なしに彼らを育てたいものです。皆さん、ぜひいろいろな絵本を読んであげてください。

田中泰子：みなさん、ありがとうございました。

(文責：田中泰子)



■ラウンドテーブル3

絵本と子育て支援

話題提供者：佐藤文郎(京都嵯峨芸術大学 芸術学部 准教授文化事業部文化事業室「あらし山びこ」実行委員長)

平野富希(京都YWCA 親子ライブラリー 共同代表)

小川登志(前：京都子育て支援総合センターこどもみらい館総務課情報担当係長)

コーディネーター：齋藤壽始子(京都女子大学非常勤講師)

はじめに

ラウンドテーブル3のキーワードは「絵本伝達」。「子育て支援」の対象を法制上の「児童」に該当する乳幼児からヤング・アダルトと捉え、話題提供は「絵本」を媒体に子育て支援に取り組む3種、乳幼児対象の京都市(自治体)、幼児から小学生対象の京都YWCA(NGO)、ヤング・アダルトを含む大学生対象の京都嵯峨芸術大学(私大)の現場から報告を得た。従って支援者は官・民を含む運営者からボランティア(一般成人・ボランティア研修の生徒・学生)が視野に入った。

現代社会の急激な変化は種々言及されるが、渦中の児童を支える仕組みは発展していない。本学会の社会的貢献の可能性は、「絵本による子育て」の仕組みを提言・提供する点にもある。

そこで、絵本と子育て支援の現状と問題点を話題提供者から、①社会面 ②人材面 ③経済・財政面にわたって報告をいただいた。次いで支援の場で活用される絵本は、児童の発達と精神文化面の成長を促し、支援者の生涯学習に相応しいメディアであるとの共通認識に立ち、「絵本」を媒体にした子育て支援を実践し、絵本の読み語りボランティアの養成に寄与する事例をフロアーからの発言を交えて確認し、本学会の社会貢献への仕組みを考察する糸口を検討した。

事例報告の要旨

報告1 京都市子育て事業(小川登志子)

京都市の子育て支援を統括する「子育て支援総合センターこどもみらい館」は、平成11(1999)年12月開設。全国初の地域の

子育て支援の拠点。幼保、公私国立の垣根を超える教育、福祉、保健医療三位一体の共同機構。乳幼児の子育て支援の道標を示し、全市的な子育て支援の土壌作りの拠点をめざす行政の中核施設の機能。以下、絵本に関わる3点を上げる。

①社会的役割 1.子育て支援の専門図書館として、絵本や子育てに関する図書等、大型絵本、紙芝居、ビデオ・CD・DVD 26,000点の所蔵。幼稚園教諭、保育士向け専門資料の収集。京都市19図書館との相互貸借。2.絵本、お話とふれあう契機づくり、絵本読み聞かせ(毎日2回)、お楽しみ会(人形劇、紙芝居、パネルシアター)、絵本リサイクル(古書の収集と希望者への提供)、赤ちゃん絵本のふれあひ会の実施。3.絵本講座(昨年から1歳以上対象)開催。4.子ども読書の日(4月)、みらいまつり(12月)を実施。

②人材面 職員は公務員の課長、係長。他は京都市生涯学習支援振興財団からの職員4名のローテーションと一般公募の子育て支援ボランティア(電話相談、元気ランド、図書整理、読み聞かせ)による。職員の人員不足は否めない。

③経済・財政面 経常費は京都市の予算。ボランティアは一律一回500円の図書カードを支給。少額で心苦しいが、子どもから元気をもらって喜んでいるとの言葉に支えられている。

報告2 NGO 地域文庫・家庭文庫(平野富希)

1923年京都YWCA設立。女性・こどものエンパワーメントをめざし1998年より子育て支援の一つに「絵本の世界」講座をスタート。大人は講座で絵本を学び、子どもは別室で絵本を楽しむ。「子育て、親育ち」の場として定着。2001年講座受講者、ボランティアから自主活動のニーズが高まり、2001年12月に「京都YWCA親子ライブラリー」が誕生。

① 理念と活動 (1)あらゆる違いを超え、各々の育ち合いを尊重するおはなしの時間や絵本を通し心豊かな場作りをめざす。毎月第1水、第4金の午後。おはなし会、絵本貸出し。未就園児と家族対象。京都YWCAの活動も担う。出張おはなし会、小学生プログラムシリーズ「こどもと平和」年3回実施 (2)親子ライブラリー活動の歩み(略) (3)スタッフと参加者の子育て支援を体験。

② スタッフ (1)ボランティアは、異年齢(17歳~82歳)、男女共同の集団。出来る時に出来る人が出来ることを担う。社会的責任を全うするには支える人数が必要。現在30名前後(常時実働要員9人)。他団体でもボランティアに積極的参加。(2)京庫連、市庫連、子育てネットワーク等に加え組織のネットワークの構築をはかる。(3)スタッフ研修の必要から、「おはなしボランティア研修」、「絵本の世界」講座、ミーティングでの学習会を実施。(4)課題ボランティアの世代交代と連続性・継続性の調整。活動による自己充実感・外部評価による達成感がボランティアを循環型として成立

させる要因。有償ボランティア活動は、活動範囲を広げる。(5)その他 ボランティアを支える京都 YWCAの専従職員。組織の立ち上げ、助成金申請等を担当。

③ 経済・財政 (1)NGOの文庫は原則無償。助成金は命綱。出張活動で資金捻出。YWCAの会館、専門職員は活動の基盤。スタッフは京都 YWCAの会員、共通経費の按分負担。(2)公益法人制度改革(2008年12月)新法施行でNGO、NPOの財政難。公益目的支出50%以上、定款整備など高いハードルの設定は、大多数の特定民法法人同様苦境に陥る。(3)有償ボランティアの実現性を求めることも視野に入る。

報告3 大学図書館における事例(佐藤文郎)

京都嵯峨芸術大学「あらし山びこ」は、図書館新館開館時、学長より図書館職員に新設の児童書コーナーの地域開放を指示。2005年度活動開始。2006年度世話人会(学内外6名)構成。児童書コーナー「あらし山びこ」を拠点に、学生と地域の住人が共に、嵯峨の伝統に学び、絵本を媒体に共同事業を展開。活動は第2土曜午後。年間10回。講演会1回。プログラム編成、内容決定・実施の過程(地域の民俗の調査・見学、テーマ設定、ポスター・チラシのデザインと作成。ブックリスト作成・集書・選書・読み語り絵本3冊の選定・自由読書用推薦図書・地域伝承遊び・図書館資料紹介・担当者決定。進行表作成)を重視。これは2008年度迄の3か年で軌道に乗る。

大学は、本年度2009年4月「あらし山びこ」を大学直轄の文化事業部文化事業室に移管、教職員、地域ボランティア代表、学生ボランティア代表で構成する「あらし山びこ」実行委員会を設置(この実行委員長に学内の世話人佐藤を任命)。学外の世話人・学外ボランティアには、アドバイザーとして内容面のサポートを委嘱。以下に、こうした改変の論理の背景を説明する。

① 現在の活動と理念 (1)活動は隔月開催。学生中心に従来通りの内容・プログラムを展開。(2)2003年中教審答申、2006年教育基本法は、生涯学習の浸透と地域教育力を重視し、自主性・自律性を培う教育を掲げた。大学は、地域の生涯活動の基盤づくりを目標に、世代間の交流による子育てに参加。ボランティアの養成・研修を通し地域の教育力向上に参画を意図した。

② 財政基盤の大学と絵本教育 1991年の大学設置基準の改訂で教養と専門の規制を緩和、芸術大学も教養部を縮小したが、芸術学はどういう根拠で学位を与えるかの課題を残す。知識の積み重ねによる高い普遍性をめざす教養教育を担う絵本教育の役割に着目。大学は自律した存在にならねばならず、学会はその後ろ盾になることが使命でもある。一方、ネットワーク、人と人・地域とのつながりは、持続可能な教育であり、絵本教育は有力なその手段に成る。

③ 大学とボランティア活動 社会教育法の改正で、大学は図書館・博物館を地域開放した。生涯学習振興方針は、大学に生涯学習コーディネーターの養成を期待する。志を持つ人に大学で教育を施し、社会の力にして社会基盤を作り出すことにある。一方、ボランティア志望者は大学に評価を期待する。各大学は財政上、評価を報酬として表せない。有償・無償とは別の評価をどう表現するか、大学関係者としては一貫した大学教育体制で認識の共有をはかって

いきたい。

一方、ボランティアは評価されず、使い捨てされる弱者なのか。教育基本法第2条に個人の価値を尊重し、能力を伸ばし、創造性を鍛え、自主・自律の精神を養うことを一般市民にも求めている。現在、地域の教育力を導入するコミュニティスクールの取り組みも進み、地域とのつながりはイベント型でなく、ネットワークを教育基盤で構築することにある。絵本はそのひとつのチャンネルであり、絵本教育が大学教育に占める役割は小さくない。

④ 今後の活動への展望(問題提起) ボランティアは現在の大学での評価状況を理解し、自律の精神で、自らの業績に対して自信をもてる体制を外で求めて行く道も探してほしい。例えばHP、ブログなどを通し活動を公表して行く。そうした共通理解の上に、ボランティアを社会基盤として育成するという視点も生まれてくる。今後も大学教育のなかで、より良く地域の理解を得ながら発展的に追求するつもりでいる。

まとめ

三つの報告はそれぞれ現場の特質をよく伝えている。一口に「絵本による子育て支援」と言っても実に多様なアプローチがあり、それぞれに課題を抱えている。ことにボランティアの増員と養成、研修は共通する課題であった。ボランティアを取り巻く社会的な課題にも目を向けなければ成らない。これらに絵本学会が応えて絵本による子育て支援の仕組みを立ち上げる事も大学・研究機関の枠を出て、学際的な連携のもとに取り組みねば成らない急ぎの課題であろう。もう一つ忘れてはならないのは、支援を必要としながら孤立して子育てに取り組んでいる若い親たちである。支援者たちのネットワークやそのためのコーディネータの養成、民間と大学・研究機関と官を繋ぐ仕組みづくりへの取り組みの必要も感じる。

フロアから児童文化財の絵本はおもちゃと異なり大人のつなぎ手が必要とすると指摘もあった。親子や保育者と子どもの枠をはるかに超え、人々、地域の繋がりに資するメディアとしての絵本とは何か。絵本学を構築する意欲の場である学会の使命を重く感じた。

(文責：齋藤壽始子)



作品発表

座長：笹本純・正木賢一

●「夕日」

加賀美裕子(東京展「絵本の部屋」運営委員・事務局委員)

●「おとうさんのひげ」

上岡秀拓(画家・イラストレーター・CGクリエイター、宝塚造形芸術大学)

●「七月生まれのあかちゃん」

村上 祐喜子(手づくり絵本夢工房)

●「デンデンムシのデン」

東山直美(日本美術教育学会)

●「ドロップ」

内海優美(会社員)

●「いま つくる2」

宮崎詞美(横浜美術短期大学グラフィックデザイン研究室)

【作品展示および作品発表について】

作品展示会場は、大学校舎にある会議室にて行われたため、照明や展示壁面などの設備が全くなかった。そこで、テーブルなど既存のものをうまく活用することにより展示を行った。展示としては手作り感が強く、作品展示として十分な設営とはいえなかったが、発表者からのご理解もいただき、何とか展示会場として発表するに至った。

作品発表会場では、OHPやパソコンの使用、実際の絵本による読み聞かせ、また実演により絵本の制作を行うなど、様々な発表形式を6名の発表者が行った。

それぞれの発表について簡単ではあるが、以下の通りである。

・加賀美裕子氏「夕日」は、素材の特性を活かしながら色彩豊か

な風景を見事に表現した作品を発表。(OHPによる発表)

・上岡秀拓氏「おとうさんのひげ」は、CGを用いたデジタル作品という新しい試みに挑戦した意欲的な作品を発表。(パソコンによりデジタル作品を発表)

・村上祐貴子氏「七月生まれの赤ちゃん」は、実体験をモチーフにパステル調の色彩を用いてあたたかさが伝わってくる作品を発表。(OHPによる発表)

・東山直美氏「デンデンムシのデン」は、見開きを工夫しながら見事な描写が印象的な作品を発表。(読み聞かせによる発表)

・内海優美氏「ドロップ」は、シャープな線描とモノトーンの色調が効果的に活かされた作品を発表。(OHPによる発表)

・宮崎詞美氏「いまつくる2」は、一枚の絵から物語を切り出す方法を実験し、水平線の効果をみる作品を発表。(絵本の制作を実演しながら発表)

今回の作品展示においては、発表者からの展示方法の指示書がなく、下開きがあったように右開き左開きが明確でなかったことや、会場の照明に不備があるなどの課題も残った。しかし、作品そのものおよび発表の質の高さからいっても、全体的に有意義な作品展示および作品発表となった。

(文責：矢野 真)



「アジアの絵本の世界へようこそ 中国と日本の絵本」を終えて

昨年11月29日、大阪国際児童文学館では、シンポジウム「アジアの絵本の世界へようこそ 中国と日本の絵本」を開催し、講師に中国の絵本作家の熊亮さん（ゆうりょう Xiong Liang 1975-）と、梶山俊夫さんをお迎えしました。当日、梶山さんは体調不良のため、ビデオ講演という形でご出演いただき、それぞれに絵本の魅力について語っていただきました。

近年、中国大陸では「絵本ブーム」が到来しています。熊亮さんは、中国の伝統文化をモチーフとした絵本づくりに取り組み、注目を集めている絵本作家です。邦訳版には、『ちいさなこまいぬ』（コンセル 2007年）という、中国のお寺や街中に座っている小さな石の獅子を描いた絵本があります。いつも同じ場所で村人たちを見守る石の獅子のいる風景に、ゆっくりとした時の流れが演出され、現在の劇的な経済成長を遂げる中国とは、異なる印象を受ける一冊です。

シンポジウム当日、熊さんは、梶山さんの絵巻物に対する考え方と、ダミーとして折本をつくる絵本の制作方法に関心をお持ちでした。また、梶山さんは、事前に熊さんの絵本をご覧になり、ゆったりとした空間を活かした構図の取り方に特徴を感じていらっしゃる

ました。後日、熊さんと梶山さんのアトリエへお伺いしました。おふたりの作風は異なりますが、日本の風土や民話を題材にした絵本を数多く制作されている梶山さんとの交流から、伝統文化に向き合うという共通項を通して、若手絵本作家の熊さんにとって学ぶ点が多かったようです。

大阪国際児童文学館では、国際交流事業の一環として、2005年度より毎年アジアの国や地域を選び、その国の絵本の研究成果を集めた報告集、展示用絵本貸出バックを作成し、シンポジウムを開催しています。これまでの韓国、台湾、タイに引き続き、今年は「中国大陸の絵本」をテーマに実施しました。今後も絵本を通しての国際交流、学術交流、絵本研究の促進が望まれますが、周知のとおり、当館は昨年末で閉館いたしました。

絵本学会の会員みなさまには、知事への数度にわたる意見書の提出、並びに署名活動等を通してご支援いただきまして、ありがとうございました。この場をおかりしまして、心よりお礼申し上げます。

会員：浅野法子（大阪国際児童文学館）

絵本学会のみなさま

このたびは大阪府立国際児童文学館の存続に対し、多大なご支援を賜りまして本当にありがとうございました。たいへん残念ながら2010年3月末日をもって閉館することになりました。かくなる仕儀に至りましたこと、誠に申し訳なく、心より深くお詫び申し上げます。

4月以降、資料は東大阪市にあります大阪府立中央図書館内国際児童文学館に移設され、図書館職員が資料の収集・整理・閲覧業務

を行います。一方、財団法人大阪国際児童文学館は府立中央図書館内に移転し、国際グリム賞、ニッサン童話と絵本のグランプリ等、子どもの本を通じて子ども文化の振興活動を続けます。

今後ともご支援ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

財団法人 大阪国際児童文学館 理事長 松居直



夢三題

内田 麟太郎

2

前々から、イースト・プレスの筒井大介さんは変わった人だなアとは、思っていたけれども……。

いきなり個展の葉書が同封されてきて、手紙には「この人の個展を見て、絵本テキストを書いてください」とあった。ほにやららら。変わった人をいくらか尊敬したがるわたしは、東中野のポレポレ座へ中野真典展を観に行った。会場の隅にそれらしき三十代前半とおもえる男性が座っている。静かなたずまい人だった。

(あの方が、そうであろう)

と思いつつも、わたしは挨拶はしなかった。だって、テキストが書けるものかどうか、自分でもワカッテオリマセン。

わたしは呆然として、その絵の前に立ち尽くした。

(こんな偶然があるのだろうか)

四十年近く、くりかえしくりかえし見ていた夢の場面がそこにあった。運命の出会いというものがあれば、これもそうだっただろう。それがどんな絵だったのかは語らない。少年の日の悲しみのままにと書けばいいのだろうか。いつもその夢から覚めると、

(なぜ、ぼくは、ここにいるの? なぜ、ぼくは、いつもここに来るの?)

という、とまどいと悲しみだけがしょんぼり残っていた。なんでやろ～、なんでやろ～。

しかし、その悲しい夢の謎も、つい二年ほど前の夢の中で答えが出た。そう、夢の中でデス。わたしは夢の中でつぶやいていた。

「わかった」

それから、同じ夢は二度と見ていない。不思議な体験だったけれども、それでもあくまでもワタグシゴトである。絵本にする気などさらさらなかったし、また、絵本にできるとも思えなかった。ただ、そんなことがワタシにはあったということだった。

その絵を買い求め、リビングに飾った。毎日、眺める。眺めて、つぶやく。

「こんな偶然があるのだろうか」

それから一月ほどして、

(書ける!)

という気持ちが、突然、ぐいと突き上げてきた。わたしは絵本テキスト『おもいで』を書いた。絵本の前半が墨一色というかなりきつい構成になっていた。

(大丈夫だろうか)

筒井さんはそのまま受け入れてくださった。編集者によっては、「ここところを、カラーにしてくれませんか」

と、求められてもおかしくはないところだろう。絵本はこれが初めてという中野真典さんは、みごとに描ききってくださいました。それがどんな絵だったかはここでは語らない。ただ、あるところで、「編

集者同士が会うと『おもいで』読んだ?』というのが合言葉のようになっていますよ」と、教えられたのはうれしいことだった。

長年解けなかった悲しい夢の謎が、夢の中で解けるという貴重な体験をした。しかも、そのことによって、悲しい夢からも解放されている。

二十代の終わりころ、ひたすらシュルレアリスムの本を読んでいた。いくらか取り憑かれたという感じである。例によってというのか、夢日記をつけ始めた。枕もとに大学ノート置き、毎朝、目が覚めると記憶にある夢をノートにとる。そんな日をくり返していたら、前夜の夢の続きを見るようになった。連続劇です。これまた不思議な、いや、驚くべき体験だった。でも、わたしはこのノートを中断した。心身共にへとへとになり倒れそうになったからである。(このままでは、危ない!)

夢については諸説あるようだが、この体験は、夢はでたらめがいとわたしに囁いている。

よく女優の夢を見ていた。

竹下景子、沢口靖子、浅丘ルリ子、松坂慶子などなど。

そんな夢で目覚めると、その日はとても幸せだった。まさに薔薇色の人生デアル。その話を詩友三人の席(酒席です)で話したら、女性遍歴の豊富なYがこともなげにいった。

「そりゃあ、内田が気が小さいからだ。浮気したくても出来ない。女優の夢なら安全だからな」

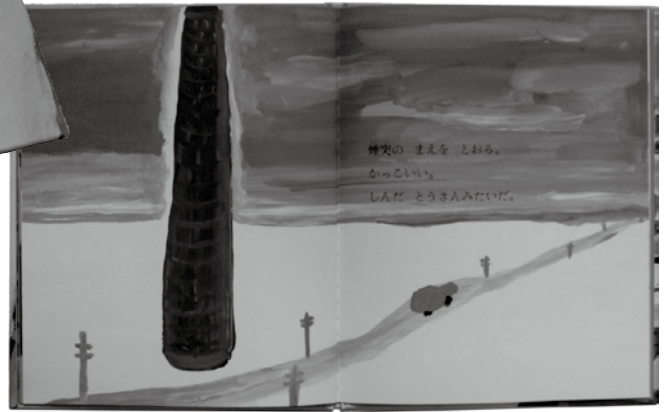
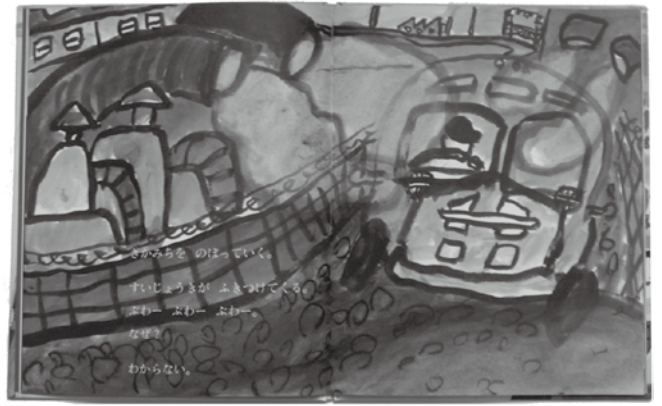
なんたる、慧眼であろう。

わたしは深く頷くものがあった。いや、まことに思い当たることである。なるほど、隣の奥さんの夢を見ていたらかなり危ないものがある。

その夜から、わたしは女優の夢を見られなくなった。知の悲しみ、認識の悲しみといえよう。それが十年ほどぶりに薬師丸ひろ子の夢を見た。


「ひろ子さーん」

自分の寝言に、がばりと跳ね起きると……。となりの布団で妻がうれしそうに笑っていた。妻の名前はひろこという。



カレンダーの裏に書かれた構想メモ





絵本関係展覧会・イベント
Information

●世田谷文学館

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山1-10-10
03-5374-9111, 03-5374-9120 (Fax)
<http://www.setabun.or.jp/>

【常設展】文学に描かれた世田谷 100年の物語

【企画展】石井桃子展

10.2.6 (土) - 4.11 (日)

●絵本美術館&コテージ 森のおうち

〒399-8301 長野県安曇野市穂高有明2215-9
0263-83-5670, 0263-83-5885 (Fax)
<http://www.morinoouchi.com/index.html>

【企画展】森のおうち所蔵原画展

10.1.29 (金) - 3.16 (火)

【企画展】おやこで楽しい絵本原画展

10.3.19 (金) - 5.18 (火)

【同時展示】降矢なな絵本原画展

●祈りの丘絵本美術館

〒850-0391 長崎県長崎市南山手町2-10
095-828-0716
<http://www.douwakan.co.jp/museum>

【常設展】大道あやコレクション 生きとし生けるものへの賛歌

●安曇野ちひろ美術館

〒399-8501 長野県北安曇郡松川村西原
0261-62-0772, 0261-62-0774 (Fax)
<http://www.chihiro.jp/azumino/>

【展示】ちひろ・母のまなざし

10.3.1 (月) - 5.11 (火)

【企画展】ちひろ美術館コレクション 世界の絵本画家展

10.3.1 (月) - 5.11 (火)

●ちひろ美術館・東京

〒177-0042 東京都練馬区下石神井4-7-2
03-3995-0612, 03-3995-0680 (Fax)
<http://www.chihiro.jp/tokyo/>

【展示】ちひろと金子みすゞ

10.3.2 (火) - 5.2 (日)

【展示】ポーランドの絵本画家たち

10.3.2 (火) - 5.2 (日)

●国立国会図書館 国際子ども図書館

〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49

03-3827-2053 (代表), 03-3827-2069 (音声案内) 03-3827-2043 (Fax)

<http://www.kodomo.go.jp/index.jsp>

【企画展】出発進行!「のりもの」本めぐりへ

09.7.18(土) - 10.2.7 (日)

●軽井沢 絵本の森美術館

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町風越公園182
0267-48-3340, 0267-48-2006 (Fax)
<http://www.museen.org/ehon/index2.html>

【企画展】木葉井悦子没後15周年回顧展 生命(いのち)の画家
〜木葉井悦子の世界

10.3.1 (月) - 6.14 (月)

●刈谷市美術館

〒448-0852 愛知県刈谷市住吉町4-5
0566-23-1636, 0566-26-0511 (Fax)
<http://www.city.kariya.lg.jp/museum/index.html>

【常設展】Face 絵のなかの面々

09.10.31 (土) - 10.2.7 (日)

【常設展】拾いの美学 木村昭平展

10.2.13 (土) - 3.28 (日)

●木城えほんの郷

〒884-0104 宮崎県児湯郡木城町大字石河内475
0983-39-1141, 0983-39-1180 (Fax)
<http://service.kijo.jp/~ehon/>

【展示】星野道夫の世界展

10.1.3 (日) - 2.28 (日)

【展示】松岡達英の世界展

10.3.13 (土) - 4.11 (日)

●射水市大島絵本館

〒939-0283 富山県射水市鳥取50
0766-52-6780, 0766-52-6777 (Fax)
<http://www.ehonkan.or.jp/>

【展示】田中清代 絵本原画展

10.1.30 (土) - 3.30 (水)

●イルフ童画館

〒394-0027 長野県岡谷市中央町2-2-1
0266-24-3319, 0266-21-1620 (Fax)
<http://www.ilf.jp/>

【展示】武井武雄が描く『世界の童話』原画展

10.2.5 (金) - 4.20 (火)

【展示】大澤コレクション展

10.2.5 (金) - 4.20 (火)

●いわむらかずお絵本の丘美術館

〒 324 - 0611 栃木県那須郡那珂川町小砂 3097
0287-92-5514, 0287-92-1818 (Fax)
<http://ehonooka.com/>

●飛騨絵本美術館 ポレポレハウス

〒 506-0205 岐阜県高山市清見町夏蔵 713-23
0577-67-3347 (Tel, Fax)
<http://www.porepore-house.com/>

【常設展】 田島征三 原画常設展示 さよならぼろ

●小さな絵本美術館 岡谷本館

〒 394-0081 長野県岡谷市長地権現 4-6-13
0266-28-9877, 0266-28-9866 (Fax)
<http://www.ba-ba.net/>
【企画展】 生誕 100 年記念 ハンス・フィッシャーの世界展
10.1.16 (火) - 3.7 (日)
会場：伊丹市立美術館

●小さな絵本美術館 八ヶ岳館

〒 391-0081 長野県諏訪郡原村原山
0266-75-3450, 0266-75-3460 (Fax)

●安曇野絵本館

〒 399-8301 長野県安曇野市穂高有明 2186-117
0263-83-6173 (Tel, Fax)
<http://www.ehonkan.net/>
【企画展】 酒井駒子 絵本 原画展
09.10.1 (木) - 10.2.28 (日)

●板橋区立美術館

〒 175-0092 東京都板橋区赤塚 5-34-27
03-3979-3251, 03-3979-3252 (Fax)
<http://www.itabashiartmuseum.jp/art/index.html>
【企画展】 開館 30 周年記念 イタリア・ポローニャ 秘蔵浮世絵名
品展
10.2.27 (土) - 3.28 (日)

●安野光雅美術館

〒 699-5605 津和野町後田イ 60-1
0856-72-4155, 0856-72-4157 (Fax)
<http://www.town.tsuwano.lg.jp/anbi/anbi.html>
【企画展】 安野光雅・旅の絵本シリーズ第 7 弾 ~新作 旅の絵本
Ⅶ (中国編) ~
09.9.11 (金) - 10.3.10 (水)
【企画展】 澤地久枝さんの安野光雅コレクション
09.9.11 (金) - 10.3.10 (水)
【企画展】 もりのえほん
09.9.11 (金) - 10.3.10 (水)

研究委員会から

「研究会」報告

今田由香・大橋真由美・永田桂子

2009 年度の研究会を下記の通り開催しましたので報告します。

◆テーマ：絵本研究の方法

◆日 時：2009 年 11 月 7 日 (土) 13:30 ~ 16:45

◆場 所：日本女子大学 目白キャンパス 百年館 201 号室

◆内 容：

①講演「今、私が 15 年戦争期 (S6 ~ 20) の日本の絵本から
学ぶこと」吉田新一氏 13:30 ~ 15:00

②グループワーク「絵本研究の方法」 15:10 ~ 16:45

◆参加者：46 名 (講演のみの参加者 20 名、講演+グループワ
ーク参加者 23 名)

◆グループワークの内容：

自分の研究のキーワードと研究方法を書いた用紙を手元に、3 グ
ループに分かれて意見交換をした。

研究委員会で 8 つのキーワードを用意したが、その他への記載も
多く、キーワードは分散した。

方法については、無記入または研究の視点を述べるものが多く、
具体的に明記された方法は「文献調査」「聞き取り」「観察実験」「市
場調査」と少なかった。

研究の視点が模索されていること、方法が確立していないことが改
めて伺われた。

討議は活発に行われ、こうした話し合いの場をもっと設けてほし
いという感想が多く残された。

◆グループワーク参加者があげたキーワード (複数回答)：

作品 (11) 表現 (10) 作家 (9) 歴史 (8) 理論 (5) 読
者 (5) 国際 (4)

その他 (イデオロギー、比較文化、医療と絵本、言語教育、環境
教育) (5)

今回の結果をふまえ、更に有意義な研究会を次回に企画します。



企画委員会から

2009年度 絵本フォーラム

「絵本一つつくることから考える」報告

杉浦篤子（企画委員長）

2009年度の絵本フォーラム「絵本一つつくることから考える」は年をまたぎ2010年1月31日（日）、札幌市北区にある藤女子大学北16条校舎に於いて、10:00～16:00まで、まる一日を使って、開催いたしました。71名の参加者を迎え、午前は講演、午後は絵本制作に関わるワークショップを通して、実り多い一日を過ごしました。

「絵本は今、溢れるように出版されています。私たちはさまざまな絵本を手にすることが出来ます。作者の思いとは、どのようなものなのでしょう。作り手となってみませんか、絵本を考えるためにも、絵本を作ってみませんか」というのが今回開催のテーマでした。

講演には元名寄短大学長であり現在大空町図書館長である松岡義和先生をお招きし、「子どもと絵本一手づくり絵本のたのしさ」のテーマでお話いただきました。長年身近な題材で制作された手作りの絵本を示されながら、手作りの絵本というのは「一冊しかないので、出版される本との違いがそこにある」ということや、造形、絵を描くことの基本的姿勢などにも話が及びました。講演終了後も、参加の人たちは先生を囲み、いろいろな質問をさせていただいているようで、90分では、足りなかったようでした。

午後のワークショップは、2グループに分かれそれぞれ希望する制作を行いました。

ワークショップ1:「子どもとつくる絵本」

山形大学文化創造学科で造形美術ご担当の和田直人先生

印画紙の上に直接物を置いて感光させるフォトグラム技法を使用し、普段なかなか接することのない方法なので、参加者は手を休めることなく、夢中で、用意されたいろいろな物の形を写し取っていました。先生は、「単なる絵本の作り方を教えるのではなく、絵本づくりの面白さを感じ取る“きかけ作り”を目指しました」と言っておられました。

ワークショップ2:「かんたん仕掛け絵本」

札幌市在住のイラストレーター、山田白百合先生

長年手作り絵本の指導をしてこられた経験を生かし、3時間半で一冊の絵本を作ることを目指してくださいました。手順よく進めてくださり、待ち時間にはご自身や子どもたちが制作したさまざまな作品を紹介、手作り絵本の多彩さを見せてくれました。中身の完成は各自に任せましたが、最後には一冊の絵本が出来上がりました。

一日を使う長いフォーラムでしたが、みなさんが楽しんで絵本の作り手となってくれたと思います。詳細につきましては後日「BOOK END」に報告を掲載いたしますので、お読みいただきたく思います。

ご参加、ご協力いただいた皆さまに、こころから感謝申し上げます。

事務局からのお知らせ

第3回絵本学会理事会 記録

日時：2009年12月13日（日）13:30-16:30

会場：日本女子大学 新泉館4階 児童学科会議室

出席者：中川素子（会長）、香曾我部秀幸（事務局長）、石井光恵、今井良朗、今田由香、大橋真由美、杉浦篤子、永田桂子、藤本朝巳
議長：中川会長

○報告事項

1. 中川会長より理事会での報告事項と審議事項の区別等、進め方について確認された。

2. 事務局

・第2回理事会議事録（2009/9/19）の確認。

・軽井沢絵本の森美術館「木葉井悦子没後15周年回顧展 生命の画家～木葉井悦子の世界」、

ちひろ美術館・東京「2000年代の日本の絵本展」の後援依頼を確認し、承認された。

・長野理事の理事会欠席の報告。次回大会に関する長野氏の見解を代読。

3. 第13回（2010年度）大会実行委員会（藤本大会実行委員長）

・大会一日目（5月3日）の講演会：講師は谷川俊太郎氏に決定。中川ひろたか氏の特別出演決定。

蔵田雅之氏（フェリス音楽学部学部長、テノール歌手）、学生、院生等の歌唱及び演奏を検討中。

・大会二日目（5月4日）のシンポジウムの話者に近藤等則、智内兄助の2氏、司会は長野理事に決定。

・実行委員として藤本理事、石井理事、今田理事、竹内美紀さん、永井雅子さん、西村醇子さん、生田美秋さんの7名決定。他に正木賢一さん候補（未依頼）。

・ラウンドテーブル：

「絵本におけることば」：藤本理事（コーディネーター）、松居直氏、宮本とも子氏（フェリス・パイプオルガン演奏者）

「子育て支援」：徳田克己氏、渡辺順子氏、大沼郁子氏等候補に挙がる。（実行委員会より依頼）

「オノマトペ」：今井理事（コーディネーター、健康上の理由から1月下旬に確定）、石井理事、他1名未定（候補に和田直人氏挙がる）。

・大会期間中の保育：地元の文庫活動関係者や、学生に依頼する予定。対象年齢は未定。

・大会参加費（一般）は、両日参加2,000円、一日参加は1,000円とする。

4. 各専門委員会

① 企画委員会

フォーラム「絵本一つつくることから考える」を2010年1月31日（日）に藤学園北16条キャンパスで開催することが報告された。

松岡義和氏（元名寄市立短大学長 大空町女満別図書館館長）による講演「子どもと絵本―手作り絵本のたのしさ」と、和田直人氏（山形大学地域教育文化学部文化創造学科教授）および山田小百合氏（札幌絵本研究会・手作り絵本講師）による絵本制作のワークショップを行う。参加費は会員、一般ともに1,000円+材料費500円、学生500円+材料費500円。

② 紀要委員会

次号紀要「絵本学」に論文11篇の応募があり、査読の結果6編（3編は論文、3編は研究ノート）の採択が決定した。2010年6月頃発行予定。

紀要の抜き刷りは有料（執筆者負担）とする。価格は30部7,000円、50部9,000円、100部11,000円。

今後の検討課題として、図版のカラー化があるが、16ページのカラーページの挿入でおおよそ8万5千円の増額を要し、執筆者の負担は過大となる。論文をホームページ掲載することも考えられるが、著作権の問題等、考慮すべき点が多く、継続課題とする。

③ 研究委員会

本年度最初の研究会「絵本の研究方法」（11月7日、於・日本女子大学）は、46名（会員18名、非会員28名）の参加者があり、好評を得た。今後も継続して開催を望む参加者の声が多かった。当日の講師である吉田新一さんより講師謝礼同額の寄付を受けた。以上のことが報告された。

広報委員会

NEWS次号は、第12回（2009年度）大会実行委員会からの報告を中心に掲載し、2010年2月中旬の発行を予定している。

例年1月・5月・9月の発行であるが、来年は2月・6月・10月とずれ込む可能性がある。次回に審議。

新連載のリレーエッセイのほか、学生記者によるインタビュー記事の掲載予定等、誌面の充実を検討していることが報告された。

機関誌編集委員会

次号「ブックエンド」の目次案が配布され、特集として「生誕100年・赤羽末吉」を組み、前号同様に新刊座談会、絵本評論、研究座談会、研究書ブックレビュー等を掲載することが報告された。発行は、従来6月の大会に間に合わせるものが慣習であったが、内容の充実を図るため、2010年9月頃を予定とすることが承認された。

○審議事項

1. 会員の入退会の承認

入会者：大島丈志、増山初子、別府浩実、加賀原由佳、わたなべゆうこ、吉崎哲矢、吉田屋幸子、大森敦子

退会者：長谷川晶子（逝去）、古川奈美子（2009年度末まで）

2. 理事会の機能と開催について

・理事会は原則的に大会開催時、および9、12、3月に開催し、決定事項は理事会席上で審議・決定する。

・理事の交通費に関して、関東圏在住の理事は交通費支給なし、特急、飛行機等の利用を要する遠方の理事は、最も安い交通手段を使用することが確認された。宿泊付のツアー料金の方が安価な場合は、宿泊も可とする。

3. 大会の運営について

・大会のテーマの設定：次回大会開催場所決定後、組織された大会実行委員会より提案し、9月ごろをめどに理事会で審議・決定する。

・大会実行委員が主体となって企画・運営するが、重要な方向性は理事会で審議・承認することが確認された。

・大会事務局の負担軽減のためにも、前大会事務局、理事会、学会事務局と連携をとりながら、準備を円滑に進めるための企画・実施マニュアルの作成が必要であることが確認された。

・大会はあくまでも研究発表を重視すべきであり、講演会やシンポジウムを派手に行う必要はない等、大会の性格と位置づけについて意見交換がおこなわれた。

・大会の企画、運営をはじめとして、絵本学会が学会としてどのような活動をすべきかを、今後も継続して検討することが確認された。

4. 絵本学会機関誌「ブックエンド」の次号（2011年度）からの方向性について

・「ブックエンド」発行にかなりの費用を費やしていることについて、検討すべきとの意見があり、絵本学会にしか作れないもの、もしくはより会員に還元できるような誌面づくりを考慮すべき、という点で合意した。

・2006年の理事会において、同誌が「アニュアルレポート」としての性格を明確化した経緯もこの点にあるが、内容の充実化を図るため隔年の発行にすることも視野に入れる、あるいは、同誌の予算を用いて別の活動を充実させるという意見もあり、同誌の方向性については今後も継続審議として検討していくことで合意した。

5. 学会入会案内の作成について

・英文の入会案内作成について審議され、日本語を使用しない者を受け入れる土壌がないため、作成しないことが決定された。

なお、HPに掲載する絵本学会の紹介文に英文を添えることが検討された。

6. 各専門委員会予算について

・企画委員の年間予算は10万円で、今年度は予算内に収める必要があるが、毎年開催地や開催頻度によって予算に収まらない場合も考えられる。企画委員会に限らず、関西での開催が今後予想される研究委員会など、専門委員会の予算は流動的に活動費を増額する必要があることが確認された。

・研究委員会より質問のあった、未執行の予算のプール化については、従来通り単年度決算とすることが確認された。

次回理事会は、2010年3月末（未定）に、日本女子大学新泉館で開催する。

第13回絵本学会大会のご案内

第13回絵本学会大会は、2010年5月3日(月)・4日(火)の両日、フェリス女学院大学 緑園校舎(横浜市)で開催されます。プログラムなど未定のところもありますが、以下のようなテーマで予定していますので、ご案内いたします。

〈大会テーマ：絵・ことば・音〉

■ 日時：2010年5月3日(月)・4日(火)

■ 会場：フェリス女学院大学 緑園校舎

〒245-8650 神奈川県横浜市泉区緑園4-5-3

■ プログラム

5月3日(月) 第1日目

12:30 受付

13:00 開会式

講演 ことばと絵(仮題)

講師：谷川俊太郎

中川ひろたか特別出演

14:50 研究発表

17:00 絵本学会総会

18:00 交流会

5月4日(火) 第2日目

8:30 受付

9:00 研究発表

作品発表

シンポジウム ー原風景の音と絵ー「ぼくが生まれた音」

パネラー：近藤等則 智内兄助

司会：長野ヒデ子

13:30 ラウンド・テーブル

R1「絵本におけることば」

コーディネーター：藤本朝巳(フェリス女学院大学)

話題提供者：松居直(児童文学研究者)、宮本とも子(フェリス女学院大学・パイプオルガン演奏者)

R2「子育て支援」

コーディネーター：大沼郁子(日本女子大学)

話題提供者：渡辺順子(東京布の絵本連絡会代表・すずらん文庫)、大塚敦子(フォトジャーナリスト)

R3「オノマトペ」

コーディネーター：今井良朗(武蔵野美術大学)

話題提供者：石井光恵(日本女子大学)、宮川健郎(武蔵野大学)

すでにリーフレット、ホームページでご案内済みですが、再度お知らせします。

● 第13回絵本学会大会研究発表者募集

◎研究発表募集要項

1. 発表者の資格：絵本学会の会員で、2009年度までの会費を納入済であること

2. 発表テーマ：絵本及び絵本に関連のある研究テーマで未発表のもの

3. 発表時間：発表20分間 質疑応答10分間

4. 申し込み要領：

1) 発表テーマ、2) 発表者の氏名・住所・電話FAX番号・メールアドレス、3) 所属機関名・職業など、4) 発表要旨(800字程度)、5) 発表時に使用する機材(PCプロジェクター・スライドプロジェクター・OHP・ODP等)

以上の1)～5)について、A4の用紙にワープロで横書きしたものを、絵本学会事務局宛てに郵送(FAX、メールは不可)してください。また、可能であれば、内容をテキストファイルにし、FD・MO・CDのいずれか(WINDOWS等のOSを明記のこと)で、同時に送ってください。

5. 申し込み締切：2010年2月27日(土)(事務局に必着)

6. 発表者の決定：研究発表は、原則として無審査とします。

発表順・時間等は、3月中にお知らせします。

*受理した原稿等は返却しませんので、必ず控えをとってください。

● 第13回絵本学会大会作品発表者募集

◎大会会場に会員の作品を展示し、会期中の所定の時間に出品者自らが制作趣旨を口頭で発表します。

◎作品発表募集要項

1. 発表者の資格：絵本学会の会員で、2009年度までの会費を納入済であること

2. 発表作品：未発表の絵本(個人制作、共同制作とも可)

3. 発表形態：判型・サイズ・頁数等は自由

原画を原寸でカラーコピーしたシートの全画面と、カラーコピーなどで製本したものを1冊出品すること

4. 申し込み要領

1) 作品タイトル、2) 発表者の氏名・住所・電話FAX番号・メールアドレス、3) 所属機関名・職業など、4) 原画サイズ・枚数以上の1)～4)について、A4の用紙にワープロで横書きしたものを、絵本学会事務局宛てに郵送(FAX、メールは不可)してください。作品は絶対に郵送しないでください。発表者自身が、直接会場に搬入します。

5. 申し込み締切：2010年2月27日(土)(事務局に必着)

6. 発表者の決定：作品発表は、原則として無審査とします。

作品搬入の期日・方法等は3月中にお知らせします。